

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2026年6月29日
【事業年度】	第17期（自 2025年4月1日 至 2026年3月31日）
【会社名】	株式会社アプラス
【英訳名】	APLUS Co., Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 嶋田 貴之
【本店の所在の場所】	大阪市浪速区湊町一丁目2番3号 （上記は登記上の本店所在地で実際の業務は「最寄りの連絡場所」で行っております。）
【電話番号】	該当事項はありません。
【事務連絡者氏名】	該当事項はありません。
【最寄りの連絡場所】	東京都中央区日本橋室町二丁目4番3号
【電話番号】	(050) 3509 - 0366
【事務連絡者氏名】	財務管理部 統轄次長 泊川 将之
【縦覧に供する場所】	株式会社アプラス 東京本部 （東京都中央区日本橋室町二丁目4番3号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次		第13期	第14期	第15期	第16期	第17期
決算年月		2022年3月	2023年3月	2024年3月	2025年3月	2026年3月
営業収益	百万円	-	83,997	94,523	95,039	106,635
経常利益	百万円	-	7,100	13,429	8,006	17,815
親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	-	4,270	7,623	8,020	15,987
包括利益	百万円	-	4,257	8,472	9,343	16,984
純資産額	百万円	-	80,481	64,206	73,550	90,535
総資産額	百万円	-	1,823,807	1,929,712	2,118,203	2,136,274
1株当たり純資産額	円	-	80,481,109,089	64,206,762,842	73,550,649,463	90,535,175,826
1株当たり当期純利益	円	-	4,270,366,510	7,623,512,947	8,020,783,304	15,987,749,468
潜在株式調整後1株当 たり当期純利益	円	-	-	-	-	-
自己資本比率	%	-	4.4	3.3	3.5	4.2
自己資本利益率	%	-	-	10.5	11.6	19.5
株価収益率	倍	-	-	-	-	-
営業活動によるキャッ シュ・フロー	百万円	-	42,256	52,166	138,158	47,272
投資活動によるキャッ シュ・フロー	百万円	-	1,452	4,583	4,752	6,306
財務活動によるキャッ シュ・フロー	百万円	-	92,339	34,661	131,086	29,196
現金及び現金同等物の 期末残高	百万円	-	135,808	113,718	101,893	113,663
従業員数	人	- (-)	1,181 (400)	1,180 (428)	1,278 (443)	1,308 (441)

- (注) 1. 当社は第14期より連結財務諸表を作成しているため、第13期については記載しておりません。
2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
3. 自己資本利益率については、当社は第14期より連結財務諸表を作成しているため、第14期以前については記載しておりません。
4. 株価収益率については、当社株式は非上場であるため記載しておりません。
5. はマイナスを示しております。
6. 従業員数欄の()内は、臨時従業員の年間平均雇用人員であり、外数であります。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第13期	第14期	第15期	第16期	第17期
決算年月		2022年 3月	2023年 3月	2024年 3月	2025年 3月	2026年 3月
営業収益	百万円	78,274	82,874	92,158	92,920	104,611
経常利益	百万円	9,481	6,953	12,895	7,385	15,544
当期純利益	百万円	4,797	2,376	6,350	7,355	16,091
資本金	百万円	100	100	100	100	100
発行済株式総数	株	1	1	1	1	1
純資産額	百万円	73,360	76,418	58,024	65,379	81,472
総資産額	百万円	1,597,451	1,757,550	1,887,013	2,083,136	2,129,449
1株当たり純資産額	円	73,360,169,072	76,418,674,031	58,024,111,846	65,379,004,843	81,472,023,906
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額)	円	2,121,611,050 (-)	- (-)	26,901,929,570 (-)	- (-)	- (-)
1株当たり当期純利益	円	4,797,823,112	2,376,007,790	6,350,913,829	7,355,163,424	16,091,548,456
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	円	-	-	-	-	-
自己資本比率	%	4.6	4.3	3.1	3.1	3.8
自己資本利益率	%	7.1	3.2	9.4	11.9	21.9
株価収益率	倍	-	-	-	-	-
配当性向	%	44.2	-	-	-	-
従業員数	人	1,190 (398)	1,154 (396)	1,139 (386)	1,183 (371)	1,210 (367)
株主総利回り (比較指標：-)	% %	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)
最高株価	円	-	-	-	-	-
最低株価	円	-	-	-	-	-

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. はマイナスを示しております。

3. 従業員数欄の()内は、臨時従業員の年間平均雇用人員であり、外数であります。

4. 株価収益率、株主総利回り、比較指標、最高株価および最低株価については、当社株式は非上場であるため記載しておりません。

2【沿革】

当社は事業持株会社であった株式会社アプラスフィナンシャルと2021年11月10日付で合併契約を締結し、2022年1月1日付で当社を存続会社、株式会社アプラスフィナンシャルを消滅会社とする吸収合併を行いました。

当社は株式会社アプラスフィナンシャルによって2009年4月に設立されましたが、以下の記載事項につきましては、株式会社アプラスフィナンシャルの沿革についても記載しております。

- 1956年10月 資本金1億円をもって大阪市東区に「大阪信用販売株式会社」を設立。大阪府下における呉服、洋服、洋装等業種別小売組合加盟の小売商に対するクーポン事業を開始。
- 1962年5月 割賦購入あっせん業者登録。
- 1962年9月 ショッピングクレジット（個別信用購入あっせん）業務を開始。
- 1962年10月 キャッシングサービス業務を開始。
- 1972年10月 クレジットカード業務を開始。
- 1976年1月 保証業務を開始。
- 1976年11月 集金代行業務を開始。
- 1978年9月 「大阪信用販売株式会社」が「株式会社大信販」に商号変更。
- 1981年11月 大阪証券取引所市場第二部に上場。
- 1984年3月 株式会社ショップ二十一（現株式会社アプラスインベストメント）を設立。
- 1984年9月 大阪証券取引所市場第一部に上場。
- 1992年4月 「株式会社大信販」が「株式会社アプラス」に商号変更。
- 2004年9月 株式会社新生銀行（現株式会社SBI新生銀行）と全面的な業務・資本提携を行い、同行が親会社となる。
- 2005年12月 アルファ債権回収株式会社を設立。
- 2006年3月 全日信販株式会社が実施した第三者割当増資の引受により、同社を子会社化。
- 2009年4月 株式会社アプラスクレジット（現 当社）および株式会社アプラスパーソナルローンを設立。
- 2010年4月 「株式会社アプラス」が「株式会社アプラスフィナンシャル」に商号変更。
「株式会社アプラスクレジット」が「株式会社アプラス」に商号変更。
株式会社アプラスフィナンシャルが吸収分割により株式会社アプラスおよび株式会社アプラスパーソナルローンに事業を承継し、事業持株会社体制に移行。
- 2013年7月 株式会社アプラスフィナンシャルが大阪証券取引所と東京証券取引所の市場統合に伴い、東京証券取引所市場第一部に上場。
- 2014年6月 本店所在地を現所在地に移転。
- 2015年3月 新生カード株式会社を吸収合併。
- 2017年7月 アルファ債権回収株式会社の全株式を株式会社新生銀行（現株式会社SBI新生銀行）へ譲渡。
- 2020年11月 株式会社アプラスフィナンシャルが東京証券取引所市場第一部から上場廃止。
- 2020年12月 株式会社新生銀行（現株式会社SBI新生銀行）の完全子会社となる。
- 2021年7月 全日信販株式会社を吸収合併。
- 2022年1月 株式会社アプラスフィナンシャルを吸収合併。
株式会社アプラスインベストメントの全株式を株式会社新生銀行（現株式会社SBI新生銀行）へ譲渡。
- 2022年11月 関西電力株式会社の子会社である株式会社クリアパスの全株式を取得し、子会社化。
- 2023年2月 株式会社全国賃貸保証を吸収合併。
- 2023年8月 株式会社アプラスインベストメントを子会社化。
- 2024年6月 アルファ債権回収株式会社を子会社化。
- 2025年4月 株式会社クリアパスを吸収合併。

3【事業の内容】

当社グループは、お客さまに提供する金融商品・サービス別のセグメントから構成されており、「ショッピングクレジット事業」、「カード事業」、「ローン事業」および「ペイメント事業」に区分し、これら4つを報告セグメントとしております。

主なセグメントの内容は、次のとおりであります。

(1) ショッピングクレジット

当社の加盟店または当社と提携するメーカー等の系列下にある販売店が割賦販売を行う場合、当社が承認したお客さまに対しては、当社がその代金をお客さまに代わって立替払を行い、お客さまから分割払により立替代金の回収を行います。また、お客さまから加盟店を通じて当社へ保証申込があった場合、当社が保証決定したお客さまに対して提携金融機関が融資を行う形態をとり、当社はその債務を保証し、債権回収業務を代行します。

(2) カード

当社が承認した会員にクレジットカードを発行し、会員は当社の加盟店（百貨店・専門店等）でカードを呈示してサインすることにより商品の購入およびサービスの提供を受けることができ、その代金は、当社が会員に代わって加盟店に立替払を行い、会員から立替代金の回収を行います。また、クレジットカードに附帯するキャッシング機能により融資を行います。

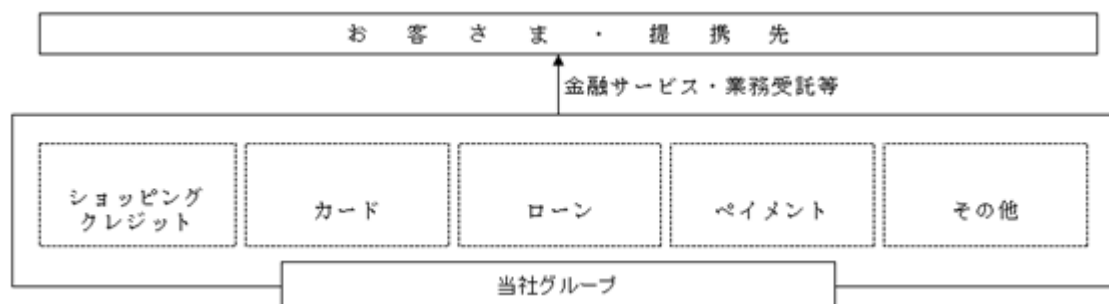
(3) ローン

住宅購入時の諸費用やリフォーム費用等を資金使途として、当社に申込みのあったお客さまに対し、融資を行います。

(4) ペイメント

当社と提携のある全国の取引先金融機関を通じて、提携先のお客さまからの集金を代行します。また、モバイル向けコード決済会社各社から決済資金を受領し、当社の加盟店に精算を行います。

事業系統図は次のとおりであります。



なお、当社グループでは、グループ内での再編の進展により、事業の重複整理や分業化・専門化が進み、各子会社の役割が明確化されました。これを契機として、従来報告セグメントとして開示していた「子会社」について、当連結会計年度より「その他」に含めることといたしました。

4【関係会社の状況】

(1) 親会社

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の被所有割合 (%)	関係内容
SBIホールディングス (株)	東京都港区	238,019	金融業務	間接 100.0	-
(株)SBI新生銀行	東京都中央区	178,507	銀行業	100.0	預金の預入 資金の借入

- (注) 1. SBIホールディングス株式会社および株式会社SBI新生銀行は、有価証券報告書を提出しております。
2. SBIホールディングス株式会社は、株式会社SBI新生銀行の議決権の71.23%を保有する親会社であります。

(2) 連結子会社

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の所有割合 (%)	関係内容
(株)アプラスインベスト メント(注)	岡山市北区	10	金銭債権の取得・回 収	100.0	役員の兼任
アルファ債権回収(株) (注)	東京都中央区	500	金銭債権の回収等	100.0	業務の委託

- (注) 特定子会社に該当しております。

(3) 持分法適用関連会社

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の所有割合 (%)	関係内容
(株)USEN FINA NCIAL	東京都品川区	100	クレジットカード・ ショッピングクレジ ット事業等	49.0	業務提携

(4) その他の関係会社

該当事項はありません。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

当社グループの経営方針、経営環境及び対処すべき課題等は、以下のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営方針

当社グループが属するSBIグループは、下記5つを共通の経営理念として掲げています。

- ・正しい倫理的価値観を持つ
- ・金融イノベーターたれ
- ・新産業クリエータを目指す
- ・セルフエボリューションの継続
- ・社会的責任を全うする

上記のもとで、当社グループではSBI新生銀行グループの目指す姿として掲げる下記の経営理念に基づき、日々の経営・業務に取り組んでいます。

- ・安定した収益力を持ち、国内外産業経済の発展に貢献し、お客さまに求められる銀行グループ
- ・経験・歴史を踏まえた上で、多様な才能・文化を評価し、新たな変化に挑戦し続ける銀行グループ
- ・透明性の高い経営を志向し、お客さま、投資家の皆様、従業員などすべてのステークホルダーを大切に、また信頼される銀行グループ

(2) 経営環境

当社グループを取り巻く経営環境は、米国の通商・経済政策の動向や中国経済の成長鈍化、地政学的リスクの長期化等により、先行き不透明な状況が継続しました。国内経済においては、物価上昇が個人消費に影響を与える一方、インバウンド需要の回復や雇用環境の改善、企業の賃上げ・設備投資の増加を背景に、景気は緩やかな回復基調で推移しました。

(3) 経営戦略等ならびに会社が優先的に対処すべき事業上および財務上の課題

当社グループでは、お客さまに求められる企業であり続けるため、SBIグループの一員として「顧客中心主義」の徹底を図るとともに、SBI新生銀行グループの中期ビジョン実現に向けた基本戦略として、「グループ内外の価値共創の追求」、「強みの深化とフルラインナップ化」、「事業を通じたサステナビリティの実現」に取り組むことで、さらなる成長を目指しております。

「グループ内外の価値共創の追求」の取り組みとしましては、当社が発行するクレジットカードのポイントサービス（「アプラスポイント」）の交換賞品として、SBI VC トレード株式会社が取扱う暗号資産を追加するなどシナジーの具現化を進めてまいりました。

[SBI新生銀行グループの中期経営計画]

SBI新生銀行グループは、2025年5月9日、2025年度から2027年度を対象期間とする中期経営計画（以下、「現中計」）を策定し、公表しております。

現中計は、SBI新生銀行グループが2021年12月にSBIグループ入りしてから約3年が経過し、両グループのより一体的かつ発展的な事業運営を推進するべく、SBIグループの事業構築の普遍的な基本観に則り、外部環境の変化も踏まえて策定したものです。

現中計の3年間で目指す姿として中期ビジョン「次世代の金融、共に築き切り拓く未来」を掲げており、中期ビジョンにおける4つの「構成要素」と、その実現のための4つの「基本戦略」から成り立っております。

(1) 中期ビジョン「次世代の金融、共に築き切り拓く未来」

4つの要素で構成した、今後3年間で目指す姿である中期ビジョン

下記の要素を達成することで、次世代金融で、お客さまや社会、従業員、またステークホルダーの皆さまと共に、より良い環境・社会・産業の実現を目指します。

A：「次世代金融」

B：「第4のメガバンクの中核」

C：「持続的な成長の実現」

D：「公的資金完済の早期実現」

(2) 中期ビジョンの構成要素

A) 次世代金融

「顧客中心主義」を進めた結果、全てのお客さまに提供される、より新しい、より高度な金融を総称したものです。具体的には、テクノロジーを活用した「次世代を感じる」金融、サステナブルファイナンスや資産承継ビジネス等のような「次世代につなぐ」金融、お客さまや地域金融機関の皆さまが投融资などを通じて「次世代に向かう」ための金融等です。

B) 第4のメガバンクの中核

第4のメガバンクとは、世界的にもユニークな「企業生態系」を有するSBIグループ、ならびに地域金融機関との連携により構成される金融ネットワークであり、当行グループがその中核、すなわち広域地域プラットフォームとなり、地域社会、地方創生に貢献することを目指します。

C) 持続的な成長の実現

財務・非財務の両面において持続的な成長を果たすものであり、収益力の拡大をはじめとした財務面だけでなく、経営基盤の強化ならびに環境の持続や社会の課題解決への貢献に伴うインパクトを高次化するという非財務面のさらなる強化によって、企業価値を加速度的に向上させることを目指します。

D) 公的資金完済の早期実現

2025年3月に合意しました公的資金確定返済スキームに沿って、公的資金の完済に向けた道を力強く歩むとともに、これまで25年以上にわたる資本面のご支援に深く感謝し、事業を通じた『社会貢献』で報いていきます。

(注) 中期経営計画の策定後、公的資金は2025年7月31日に完済しております。

(3) 中期ビジョンを実現するための基本戦略 ~

融合と連携の進化

当行グループが強みを有する分野において独自に取り組みを強化するだけにとどまらず、SBIグループ内の全方位的な融合、地域金融機関とのより強固な連携、インオーガニックな出資・買収の推進、外部パートナーとのオープン・アライアンスを通じ、新たな収益機会の創出・拡大を図っていきます。

量質転化の追求

預金量や営業性資産といった「量の拡大」を図りつつ、質の高い商品・サービスを提供し、効率的な業務運営をすることによって、品質・収益性・効率性といった「質の向上」へ、より意識的につなげていきます。

堅牢かつ柔軟な経営基盤

人的資本運営の有機的発展、革新的技術の利活用と戦略的ITシステム投資、攻守一体のリスク管理、バランスシートマネジメントの高度化、強靱なコンプライアンス態勢により、常に自己進化し、先見性を備えた経営基盤を強固に構築していきます。

サステナビリティ経営の深化

「事業を通じた環境・社会・お客さまへの長期的な貢献」と「当行グループの持続的な成長」との好循環を戦略的に実現していくため、気候変動への対応・地方創生・人的資本経営の取り組みを優先事項に位置付け、企業価値向上へのつながりを強化していきます。

2【サステナビリティに関する考え方及び取組】

SBI新生銀行グループのサステナビリティに関する考え方及び取組は、次のとおりであります。

本項においては、将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は本有価証券報告書提出日現在において判断したものであります。

当社は、SBI新生銀行グループの一員としてサステナビリティに取り組んでおります。

SBI新生銀行グループならびに当社の取組状況は以下のとおりです。

(1) ガバナンス

・サステナビリティに対するSBI新生銀行グループの考え方

SBI新生銀行グループは、サステナビリティ経営を、「事業を通じた環境・社会・お客さまへの長期的な貢献」と「SBI新生銀行グループの持続的な成長」との好循環を目指すこと、であると定義しました。これは、SBIグループの「公益は私益に繋がる」という理念と軌を一にするもので、環境・社会課題の解決を経営の最重要課題の一つと捉え、持続可能な開発目標(SDGs)やパリ協定など、社会的な課題解決の枠組みを認識した上で、サステナビリティ経営を積極的に推進しています。総合金融グループならではの機能とノウハウを活かし、また、SBIグループのあらゆる機能を存分に活用し、さまざまな課題解決に取り組むあるいは課題を抱える組織や個人を金融の力でつなぎ、新たな価値を生み出し、お客さまの事業や生活・人生、ひいては環境・社会をより良いものにしていくと同時に、SBI新生銀行グループの企業価値を継続的に高めていきます。また、一人ひとりの従業員の活躍と成長が、お客さまや社会への価値創出とSBI新生銀行グループの持続的な成長の源泉であると考え、人材価値の向上を重視し、魅力ある組織づくりを進めています。

・サステナビリティ経営の推進体制

SBI新生銀行グループのサステナビリティ経営推進は、取締役会の監督のもと、グループ経営会議にて意思決定を行っています。グループ重要委員会の一つとしてグループサステナビリティ委員会を設置し、チーフサステナビリティオフィサー(CSO)及びシニアサステナビリティオフィサー(SSO)がそれぞれ委員長及び副委員長を務め、SBI新生銀行会長、社長の他、グループ会社を含む関連部署の執行役員、部長などが委員となっています。2025年度には6回開催し、個別ビジネスにおける取り組みやSBI新生銀行が賛同するイニシアティブに関する開示事項検討・実施状況報告、サステナビリティ関連の開示など、さまざまな議案を協議しています。取締役会及びグループ経営会議に対してはサステナビリティ経営推進に係る定期報告を行うとともに、重要事項の付議を行っています。またグループ本社にサステナビリティ経営の企画・立案・推進を行うサステナビリティ&コミュニケーション統括部を設置する他、SBI新生銀行のビジネスセグメント及びグループ各社にサステナビリティ推進組織を設置し、推進を強化しています。

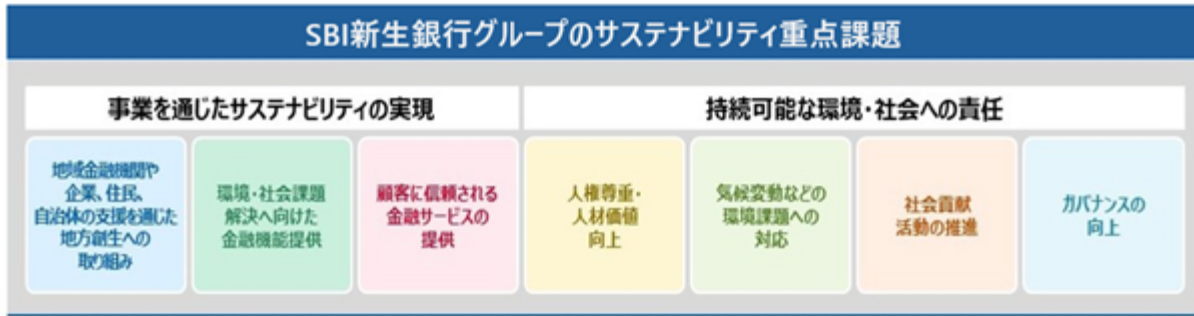
人的資本・人権の分野においては、重要委員会の一つであるグループ人材委員会、グループダイバーシティ&インクルージョン委員会及びグループ人権推進委員会を設け、SBI新生銀行グループのダイバーシティ&インクルージョンや人権デュー・ディリジェンスの取り組みをはじめ、人事制度や諸施策などについての協議、調整及び決定を行っています。

・サステナビリティ関連ポリシー

SBI新生銀行グループは、「SBIグループ・コンプライアンス行動規範」及び「SBI新生銀行グループ行動憲章」のもと、サステナビリティ経営基本方針として「グループサステナビリティ経営ポリシー」を制定しています。個別課題への取り組みにおいては、「グループ人権ポリシー」、「グループ社会貢献推進ポリシー」、「SBI新生銀行グループサイバーセキュリティ経営宣言」、「個人情報保護の基本方針」、当社の「個人情報保護方針」と「特定個人情報保護方針」などの社内規程を制定及び公表しています。加えて、「責任ある投融資に向けた取組方針」、「クレジットポリシー」などの社内規程において環境や人権などサステナビリティ関連リスクを考慮した投融資判断が行われる体制を構築しています。

(2) 戦略

・サステナビリティ重点課題



事業を通じたサステナビリティの実現

SBI新生銀行グループのサステナビリティ重点課題の1つでもある「事業を通じたサステナビリティの実現」とは、地方創生への取り組み、環境・社会課題解決へ向けた金融機能提供を行うと同時に、顧客に信頼されるサービスを提供することにより金融機関としての社会的責任を果たしていくことです。

投融資においては、サステナブルファイナンスを2030年度までに累計5兆円組成するという目標を掲げ、お客さまによるサステナビリティへの取り組みを金融面から支援しています。再生可能エネルギーに対するプロジェクトファイナンス、介護・医療関連施設へのヘルスケアファイナンス、ヘルスケア領域へのリースやZEHファンドなど、環境・社会課題の改善に資する事業に資金使途が限定されたファイナンスはその一例です。また、脱炭素社会の実現に向けては温室効果ガス排出量の多い企業を金融面から支えると同時に脱炭素化を支援していくことが不可欠であると考え、部署間横断のトランジション・タスクフォースを組成し、お客さまとの対話を行っています。

個人のお客さまに向けては、金融サービスへのアクセス向上や金融リテラシーの普及促進に努めるほか、お客さま本位の業務運営に関する取組方針とアクションプランを制定、公表し、アクションプランについては実績測定及び公表も行っていきます。また、自宅に太陽光発電を導入するためのクレジットやリースなどの商品・サービスを提供しています。

持続可能な環境・社会への責任

SBIグループでは、企業は社会との共生の中でのみ繁栄することができると考えており、SBI新生銀行グループでも環境・社会の持続可能性の向上に対して企業として責任を果たしてまいります。

人権尊重・人材価値向上：国際的規範や法令等に基づいた高い水準で人権尊重に取り組むことにより、企業に求められる責任を適切に遂行してまいります。また、従業員一人ひとりが年齢・性別・国籍・障がいの有無・性的指向または性自認などの属性にかかわらず、やりがいを持って働き活躍できる企業を目指します。多様な従業員が個々の力を最大限発揮し、お互いの強みを活かしあうことでシナジーを生み、持続的な価値創造を実現し、お客さまひいては世の中に貢献します。特に重要な意思決定に関わる中核人材の多様性を重視し、多様性を前提とした人材育成・人事制度の構築等を行っています。

環境課題への対応：気候変動対応を最重要課題とし、自社としての温室効果ガス排出量削減に取り組むほか、お客さまの排出量の把握及び削減にも協働して取り組んでいます。

社会貢献活動：「従業員が共感を持って参画できる、持続可能な社会の創出にポジティブなインパクトを与える活動」と位置づけ、「社会の多様性推進」「環境保全」「地域貢献」「SBIグループとの連携」を重点分野として取り組んでいます。

当社が取り組む信販ビジネスにおいては、「社会の変化や多様なニーズを踏まえた金融サービスの提供」というSBI新生銀行グループのサステナビリティ目標の下、「環境配慮型商品の普及を通じたカーボンニュートラルへの貢献」、「多様なお客さま・地域への金融サービス提供を通じた金融包摂、地方創生の実現」、「キャッシュレス決済の拡大を通じた夢のある社会生活の創造」という個別目標を設定し、関連ビジネスの成長拡大を通じたサステナビリティの実現を目指しています。

環境配慮型商品の普及を通じたカーボンニュートラルへの貢献

再生可能エネルギーによる発電や電力使用の効率化を促進する商品（太陽光発電システム、エコキュート等）や化石燃料の使用に伴う温室効果ガス排出を削減する商品（電動車等）のショッピングクレジット、リースを通じた社会への普及を促進し、カーボンニュートラルへの貢献を目指しています。

多様なお客さま・地域への金融サービス提供を通じた金融包摂、地方創生の実現

既存の金融サービスを十分に受けにくい人々や企業、地域のお客さまに対して、グループ内外の価値共創による新しい金融サービスの提供を通じて、事業を通じた社会課題の解決に取り組むことにより、金融包摂と地方創生の実現を目指しています。

キャッシュレス決済の拡大を通じた夢のある社会生活の創造

環境負荷の軽減や非対面・非接触による防疫効果などが期待されるキャッシュレス決済（クレジットカード、オートネットサービス、コード等決済）の拡大を通じて、お客さまの利便性の向上や地域経済の活性化に貢献し、お客さまと共に夢のある社会生活の創造を目指しています。

・気候変動に関する戦略

気候変動への対応は、リスクであると同時に、新たなビジネスチャンスを生み出すものと考えています。また、社会全体の持続可能性を高めるための重要なステップでもありと認識しています。以下のような取り組みを通じて、持続可能な社会の実現に貢献していくことを目指しています。

- ・再生可能エネルギー向けプロジェクトファイナンス。
- ・環境対応船舶や環境対応不動産(ZEH/ZEB)等、グリーンな社会・産業インフラへのファイナンス。
- ・高排出セクターを中心としたトランジションファイナンス（移行支援ファイナンス）。
- ・自然災害復旧・対策に使用される建設機械のリースや中古物件売買仲介。
- ・環境関連法等を遵守しながら、モノの再利用・資源化などサーキュラーエコノミーに貢献する動産一括処分支援。
- ・太陽光パネルへのショッピングクレジットやリースを通じた再生可能エネルギー向け小口ファイナンス。

気候変動に関するリスクとしては、主に2つの面でSBI新生銀行グループに影響を及ぼすと考えています。

- ・物理的リスク：洪水、暴風雨などの気象事象によってもたらされる財物損壊などの直接的インパクト、グローバルサプライチェーンの中断や資源枯渇などの間接的インパクト。
- ・移行リスク：脱炭素経済への移行に伴い、温室効果ガス排出量が多い金融資産の再評価によりもたらされるリスク。

「気候関連財務情報開示タスクフォース（TCFD：Task Force on Climate-related Financial Disclosures）」のフレームワークに基づくシナリオ分析、物理的リスク・移行リスクの計測等の詳細は、SBI新生銀行の統合報告書2026をご参照下さい。（<https://corp.sbishinseibank.co.jp/ja/ir/library/integrated.html> 2026年7月発行予定）

・人的資本に関する戦略

人材育成方針

SBI新生銀行グループは、2025年度からの中期経営計画において、堅牢かつ柔軟な経営基盤の構築に向け、人的資本経営の有機的発展を基本戦略の一つとして掲げています。

「採用」・「育成」・「活躍」を柱とし、これらを支える体制や環境を整備することにより、人的資本経営を推進し、多様・多層な人材ポートフォリオを実現し、従業員エンゲージメントの向上を図り、SBI新生銀行グループの人材が当グループの「企業生態系」の中において中核的な存在感を発揮することを目指しています。

また、グループサステナビリティ経営ポリシーに基づき、組織基盤の強化に向けて、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（多様性・公平性・包摂性）、健康経営・ウェルビーイング、従業員のエンゲージメント向上に取り組んでいます。

人材の確保にあたっては、通常の採用ルートに加え、アルムナイ（退職者ネットワーク）の活用やリファラル採用（従業員からの紹介）といった多様なチャネルを活用しています。育成においては、Off-JTとOJT、人事異動を組み合わせた体系的な育成を実施しています。

また、各業務の総括役員や担当役員から構成される「人的資本戦略会議」において、要員の状況や部門間の人員の異動について議論するとともに、「人材シート」を活用し、所属部室店とグループ人事部が連携して従業員の能力や志向を把握し、次世代を担うリーダーの育成および適材適所の人材配置を推進しています。さらに、様々な業務経験を通して個人の成長を促進するため、異動・ローテーションやグループ内公募を実施しています。

育成施策として、OJTに加え、ダイバーシティ&インクルージョン(D&I)、コンプライアンス、人権・ハラスメント研修といった共通研修を実施するとともに、所属する部署や職務に応じた専門研修を提供しています。部店長等に対しては、評価者研修やキャリア支援に関する研修を実施するとともに、新任マネジメント向けの人事・法務・コンプライアンスに関するガイダンスを行い、部店レベルでの人的資本運営を支援しています。さらに、管理職及び管理職候補者に対しては、昇格時研修および360度フィードバックを通じて、マネジメント能力の向上を図るとともに、次世代の経営を担う人材の計画的育成を進めています。

このほかにも、従業員の自律的なキャリア形成を支援するため、全社員向けのキャリア研修の実施や、リスクリング・アップスキリングをサポートするオンライン学習環境および資格取得奨励制度を整備しています。また、スキルアップや社外ネットワークの拡大、視野の広がり、経験の幅を広げることを目的として、兼業・副業を認めています。

社内環境整備方針

SBI新生銀行グループでは、継続的な価値創造の実現に向け、多様なバックグラウンドを有する人材がライフステージやライフイベント等の制約にとらわれず、時間や場所に柔軟に対応した働き方ができる職場環境の実現に取り組んでいます。

具体的には、在宅勤務、時差勤務、フレックスタイム勤務およびフレキシブルワーキング制度等を導入し、働き方の多様な選択肢を提供するとともに、業務特性に応じて成果を引き出すために最適な働き方を組み合わせられる環境を整備しています。また、上司と部下が定期的に個々の成長に通じる対話の機会を持つ「1on1ミーティング」を推進しています。

2023年度からはエンゲージメント調査を実施し、従業員のエンゲージメント状況を定期的に把握するとともに、「従業員の成長やキャリア形成の支援」および「働きがいの向上」を重点課題として、改善施策を推進しています。

職場環境の基盤となる人権や従業員の健康については、グループ人権ポリシーに基づき、人権デュー・ディリジェンスに関する従業員アンケート調査を実施し、職場の状況を把握するとともに、改善に努めています。また、従業員が心身ともに健康で働くことができるよう、健康保険組合、産業医等の関係者と連携し、従業員の健康経営への取り組みを進めています。具体的な取り組みとして、ストレスチェック結果と課題を各部署にフィードバックするとともに、全従業員を対象にメンタルヘルスに関するeラーニングの実施、社外カウンセリング窓口の設置、また、スマートフォンアプリで参加可能なウォーキングイベントの実施等を行っています。

こうした取り組みを通じたSBI新生銀行グループの人的資本に関する主な指標については、SBI新生銀行ウェブサイト、統合報告書等において、定期的に公表しています。

(3) リスク管理

SBI新生銀行グループでは、経営上重大な影響を及ぼす可能性の高いリスクを「重要なリスク」（トップリスク）とし、定量化が困難な非財務リスクも含めて選定し、予兆管理の高度化や対応力の強化を重点的に取り組んでいます。

有価証券報告書提出日時点で、重要なリスクの一つとして、「環境・社会問題対応の不備による評判悪化」を選定しています。

サステナビリティ関連のリスクを識別、評価、管理するために、気候変動等の環境や人権などサステナビリティに関するリスクの影響が大きい業界やSBI新生銀行グループの投融資禁止/留意対象先を特定した上で、投融資の検討開始時から投融資完了までの各プロセスでサステナビリティ関連リスクが考慮されるよう社内規程を制定しています。また、気候変動においては移行リスクと物理的リスクを定量的に計測し、年に1回グループサステナビリティ委員会に報告しています。その他、勉強会の実施などを通じて従業員の理解を深めています。

サステナビリティ関連の機会については、金融機関として環境・社会課題の解決に貢献するビジネスを展開するお客さまをさまざまな形で支援することがSBI新生銀行グループ自身のビジネス機会にもつながると考えています。国内外の関連原則と整合した「SBI新生銀行グループグリーンファイナンス・フレームワーク」「SBI新生銀行グループソーシャルファイナンス・フレームワーク」「SBI新生銀行グループサステナビリティファイナンス・フレームワーク」などを策定し、サステナブルファイナンスの推進に努めています。

(4) 指標及び目標

・サステナビリティ目標

SBI新生銀行グループでは、サステナビリティ重点課題に基づきサステナビリティ目標を設定しています。特にサステナブルファイナンス組成金額、SBI新生銀行グループ及び投融資先の温室効果ガス排出量については、毎年実績を測定し、公表しています。2025年度実績は、SBI新生銀行の統合報告書2026をご参照下さい。

(<https://corp.sbishinseibank.co.jp/ja/ir/library/integrated.html> 2026年7月発行予定)

項目	目標
環境・社会課題解決への資金提供	サステナブルファイナンス組成金額を2030年度末までに累計5兆円。温室効果ガス高排出セクター企業のトランジション推進の支援。
社会の変化や多様なニーズを踏まえた金融サービスの提供	社会の変化やお客さまの価値観の多様化に対し、フィンテックの活用や事業パートナーとの連携を通じ、グループ一体となってお客さまに新たな価値及び選択肢を提示し続ける存在となること。
グローバルな視点での環境・社会問題の解決に貢献	日本国内に限らず、新技術を駆使した金融サービスを提供し、環境・社会問題を解決。
環境・社会課題解決のための資金の流れの構築	環境・社会課題解決をテーマに資金調達者と資金提供者を結び付けるため、個別の課題ごとの商品を提供。
人権尊重・人材価値向上	人権尊重に関する推進・管理体制を確立し、企業に求められる責任を適切に遂行。 従業員一人ひとりの持つ価値観や個性を認め、その強みと特性が最大限に発揮される環境の整備。 多様性が融合しながら共存し、新しい価値の創出を実現する組織風土の醸成。
気候変動への対応	SBI新生銀行グループのエネルギー使用に伴う温室効果ガス排出量を2030年度末までにネットゼロ。 SBI新生銀行グループの投融資先ポートフォリオにおける温室効果ガス排出量を2050年度末までにネットゼロ。 石炭火力発電向けプロジェクトファイナンス融資残高を2040年度末までにゼロ。
社会貢献活動の推進	持続的な社会貢献活動による社会的インパクトの創出と可視化。
ガバナンスの向上	サステナビリティに取り組むにあたっての取締役会監督体制及び経営執行体制の確立。 評価及び報酬におけるサステナビリティへの取り組み状況の考慮。 サステナビリティに関するリスク管理体制の構築。

当社が取り組む信販ビジネスにおける個別目標は、以下のとおりです。

項目	目標
社会の変化や多様なニーズを踏まえた金融サービスの提供	環境配慮型商品の普及を通じたカーボンニュートラルへの貢献
	多様なお客さま・地域への金融サービス提供を通じた金融包摂、地方創生の実現
	キャッシュレス決済の拡大を通じた夢のある社会生活の創造

・気候変動に関する実績

主要グループ会社の温室効果ガス排出量の実績は、以下のとおりです
同2025年度実績は、SBI新生銀行の統合報告書2026をご参照下さい。

(<https://corp.sbishinseibank.co.jp/ja/ir/library/integrated.html> 2026年7月発行予定)

	2022年度実績	2023年度実績	2024年度実績
Scope 1 (CO ₂ 直接的排出量) (tCO ₂)	941	921	698
Scope 2 (CO ₂ 間接的排出量) (tCO ₂)	10,068	9,110	8,230

(注) 1. 上記数値は、株式会社SBI新生銀行及びその主な国内子会社とUDC Finance Limitedの合計値。

2. 都市ガス、重油、ガソリン、軽油、冷水の利用に伴うCO₂換算については、地球温暖化対策の推進に関する法律(温対法)に基づく係数を使用、電力は温対法に基づく「温室効果ガス排出量算定・報告・公表制度」における電気事業者別の調整後排出係数を使用。

・人的資本に関する指標及び目標

SBI新生銀行グループは、上記「(2)戦略 人的資本に関する戦略」において記載した、人材の多様性の確保を含む人材の育成に関する方針及び社内環境整備に関する方針について、次の指標等を用いております。当該指標に関する実績及び目標は、次のとおりです。

また、人材育成を含む人材に関する取組の状況を把握する指標として、エンゲージメント調査における「成長・キャリア」及び「働きがい」に関するスコアを用いております。

エンゲージメントスコア実績は、統合報告書2026をご参照下さい。

(<https://corp.sbishinseibank.co.jp/ja/ir/library/integrated.html> 2026年7月発行予定)

指標	2025年度実績	目標
管理的地位にある労働者に占める女性労働者の割合	25.9%	2027年度までに28%
男性労働者の育児休業等取得率	140%	90%以上
フルタイム労働者一人当たりの各月ごとの法定時間外労働・法定休日労働時間	14.5時間	16時間以下維持
平均有給休暇取得率	79.8%	70.0%以上維持

(注) 1. SBI新生銀行グループの主要な会社において表中の取組を進めておりますが、当社連結子会社は目標及び指標の公表を行っていないことから、提出会社に関する目標及び実績を記載しています。

2. 「管理的地位にある労働者に占める女性労働者の割合」及び「男性労働者の育児休業等取得率」の算出方法等については、「第4 提出会社の状況 5 従業員の状況等」をご参照下さい。
3. 平均有給休暇取得率は、各年度内に提出会社の全ての従業員に対して付与された有給休暇の日数に対する、提出会社の全ての従業員が取得した有給休暇の日数の割合を示しています。

3【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が会社の財政状態、経営成績およびキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスクは、以下のとおりであります。なお、当社グループは、これらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避および発生した場合の対応に努める所存であります。

本項においては、将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は当連結会計年度末現在において判断したものであります。

(1) 経済環境の変化について

当社グループの主力事業であるショッピングクレジット、カード等の事業は、経済環境の変化などによる個人消費の低迷や、雇用情勢の悪化等が続いた場合、取扱高の減少や返済状況への影響により、収益の減少および貸倒関連コストの増加が生じ、業績に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 市場の競争激化について

消費者信用マーケットは、近年、カード事業における異業種の参入を始め、極めて競争の激しいものとなっております。こうした競争の激化に伴い、収益率の低下や優良取引先との取引状況に変化などが生じ、業績に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 大規模災害等の発生について

当社グループは、大規模災害等が発生した場合に備え、業務継続体制に関連する規程および業務継続計画（BCP）を制定し、教育・訓練を実施しております。しかしながら、予想を超えた災害等が発生した場合には、当社グループの業務継続が困難となり、業務運営や業績に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 貸倒引当金の充分性について

債権の貸倒による損失に備えるため、貸倒実績率等により算出した必要額を貸倒引当金として計上しておりますが、景気の動向、個人破産申立の増加、その他の予期せざる理由により、貸倒引当金を積み増しせざるを得なくなるおそれがあります。

(5) 金利の変動について

当社グループは、変動金利による資金調達を行っているため、金融情勢の変化によっては、想定外の調達コストの変動が生じ、業績に影響を及ぼす可能性があります。

(6) 資金調達について

当社は、株式会社格付投資情報センターから発行体格付けAの格付けを取得（2025年9月1日現在）しておりますが、当社グループの業績が悪化すれば、格付けや信用力が低下し、資本市場や金融機関からの調達コストの上昇などを招き、業績に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 個人情報管理について

当社グループは、多くのお客さまの個人情報を保有する企業として、2005年11月には「プライバシーマーク」の認定を取得するなど、個人情報保護に高い意識を持ち、個人情報保護法に従い個人情報の保護に努めております。しかしながら、万一、個人情報の紛失や漏洩事件が発生した場合、社会的信用の失墜、損害賠償責任などが発生し、業績に影響を及ぼす可能性があります。

(8) 情報システムへの依存について

当社グループの事業は、コンピュータシステムに大きく依存しており、各種データ処理のバックアップデータの確保や、施設の耐震・防災設備などにより、強固で安全なシステム体制を構築しております。しかしながら、人為的ミス、自然災害、停電、サイバー攻撃、クラウドサービス事業者等の第三者からのサポートサービス中断等が生じた場合には、システムに重大な支障が生じる可能性があり、信頼性の低下や、業務への支障により、業績に影響を及ぼす可能性があります。

(9) 法的規制等について

割賦販売法、特定商取引法

当社グループのショッピングクレジット事業およびカード事業は、「割賦販売法」の適用を受けており、これにより各種の業務規制を受けております。今後、同法が改正された場合、その内容によっては業績に影響を及ぼす可能性があります。

また、当社グループの提携先の中には「特定商取引法」の適用を受ける提携先があります。今後、同法が改正された場合、その内容によっては、業績に影響を及ぼす可能性があります。

貸金業法等

当社グループの融資関連事業は、「貸金業法」等の適用を受けており、これにより各種の業務規制を受けております。今後、同法が改正された場合、その内容によっては業績に影響を及ぼす可能性があります。また、これまでの貸付に対しての「利息制限法」の上限金利を超える利息部分の返還請求に伴い、超過利息の返還等を行う場合があります。当社グループは、利息の返還に伴う損失見込額について引当金を計上しておりますが、予想以上の返還請求を受けた場合は、業績に影響を及ぼす可能性があります。

(10) 株式会社SBI新生銀行との関係について

当社グループは、株式会社SBI新生銀行を中心とする企業グループの一員であり、SBI新生銀行グループにおける消費者向けファイナンスの中核企業グループとしての位置付けの中で、グループとしてのシナジー効果を最大限に発揮することで収益の拡大に努めております。

当社と株式会社SBI新生銀行との関係に今後何らかの変化があった場合には、業績に影響を及ぼす可能性があります。

4【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

財政状態および経営成績の状況

当連結会計年度の経営環境は、米国の通商・経済政策の動向や中国経済の成長鈍化、地政学的リスクの長期化等により、先行き不透明な状況が継続しました。

国内経済においては、物価上昇が個人消費に影響を与える一方、インバウンド需要の回復や雇用環境の改善、企業の賃上げ・設備投資の増加を背景に、景気は緩やかな回復基調で推移しました。

このような中、SBI新生銀行グループは2025年度から2027年度を対象期間とする中期経営計画を策定し、「次世代の金融、共に築き切り拓く未来」を中期ビジョンに掲げ、「融合と連携の進化」、「量質転化の追求」、「堅牢かつ柔軟な経営基盤」、「サステナビリティ経営の深化」を基本戦略として、計画達成に向けてグループ一体となって各種施策に取り組んでおります。

当連結会計年度の業績につきましては、営業収益は106,635百万円（前連結会計年度比12.2%増）、営業費用は88,869百万円（同2.1%増）となりました。この結果、営業利益は17,766百万円（同122.7%増）、経常利益は17,815百万円（同122.5%増）、親会社株主に帰属する当期純利益は15,987百万円（同99.3%増）となりました。

セグメント別の業績は次のとおりであります。

ショッピングクレジット

当セグメントにつきましては、オート（リースを含む）、住宅用太陽光発電システム、宝石・貴金属、事務機器・業務用機器、医療分野等を重点推進業種として位置づけ、調達金利の上昇を踏まえた適切な金利設定により、収益性の向上を図る営業戦略を推進してまいりました。

当セグメントにおける営業収益は55,990百万円（前連結会計年度は45,199百万円）、セグメント利益は12,190百万円（同5,586百万円）となりました。

カード

当セグメントにつきましては、Mastercard®最上位クラスのステータスクレジットカードである「LUXURY CARD」を中心とする拡大戦略に取り組んでまいりました。2025年8月には、日本航空株式会社（以下「JAL」という。）と提携し、JAL最高峰のメタルカード「JAL Luxury Card」の発行を開始いたしました。

当セグメントにおける営業収益は24,043百万円（前連結会計年度は22,980百万円）、セグメント利益は275百万円（同815百万円の損失）となりました。

ローン

当セグメントにつきましては、住宅購入時に必要な諸費用等を対象としたローン「マイホームプラン」の利用拡大に取り組んでまいりました。

当セグメントにおける営業収益は4,444百万円（前連結会計年度は4,464百万円）、セグメント利益は1,543百万円（同2,020百万円）となりました。

ペイメント

当セグメントにつきましては、手数料改定や新規獲得を通じた営業活動により、収益性の向上を図る取り組みを進めてまいりました。キャッシュレス化の進展や非対面・デジタル取引の需要拡大を背景に、主力のオートネットサービスおよび家賃サービスは引き続き堅調に推移しております。

当セグメントにおける営業収益は19,246百万円（前連結会計年度は19,339百万円）、セグメント利益は2,481百万円（同2,607百万円）となりました。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物は、前連結会計年度末に比べ11,769百万円増加し、113,663百万円となりました。各活動におけるキャッシュ・フローの状況は以下のとおりであります。

営業活動の結果増加した資金は、47,272百万円（前連結会計年度は138,158百万円の減少）となりました。これは主として、売上債権の減少によるものであります。

投資活動の結果減少した資金は、6,306百万円（前連結会計年度は4,752百万円の減少）となりました。これは主として、無形固定資産の取得によるものであります。

財務活動の結果減少した資金は、29,196百万円（前連結会計年度は131,086百万円の増加）となりました。これは主として、借入金等の減少によるものであります。

営業実績

ア. セグメント別営業収益

セグメントの名称	金額（百万円）	前年同期比（％）
ショッピングクレジット	55,990	123.9
カード	24,043	104.6
ローン	4,444	99.6
ペイメント	19,246	99.5
報告セグメント計	103,724	112.8
その他	3,793	117.7
合計	107,517	112.9

（注）金額は、セグメント間の内部消去前の数値によっております。

イ. セグメント別取扱高

セグメントの名称	金額（百万円）	前年同期比（％）
ショッピングクレジット	684,358	90.6
カード	807,186	102.7
ローン	8,958	45.6
ペイメント	2,987,891	105.7
報告セグメント計	4,488,394	102.3
その他	2,633	7.5
合計	4,491,027	101.5

（注）1. セグメント別取扱高の範囲は、主として次のとおりであります。

アドオン方式の場合は、クレジット対象額または保障元本に手数料を加算した金額であります。リボルビング方式および残債方式の場合は、クレジット対象額、融資額または保証元本であります。ペイメントは、集金代行金額等であります。

2. 金額は、セグメント間の内部消去後の数値によっております。

ウ. 融資における業種別貸出状況

業種	前連結会計年度 （2025年3月31日）			当連結会計年度 （2026年3月31日）		
	貸出金残高 （百万円）	構成比 （％）	貸出件数 （件）	貸出金残高 （百万円）	構成比 （％）	貸出件数 （件）
卸売、小売・飲食店	0	0.0	1	-	-	-
不動産業	0	0.1	2	0	0.1	2
個人	200,542	99.9	275,627	187,890	99.9	256,704
合計	200,543	100.0	275,630	187,890	100.0	256,706

エ. 融資における担保別貸出状況

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
担保の種類	貸出金残高(百万円)	貸出金残高(百万円)
不動産	42,763	39,624
信用	157,779	148,266
合計	200,543	187,890

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討

経営者の視点による当社の経営成績等の状況に関する認識および分析・検討内容は次のとおりであります。
なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

財政状態および経営成績の状況に関する認識および分析・検討結果

当社グループの当連結会計年度における経営成績等(前連結会計年度比)は、ショッピングクレジット事業を中心とする主力ビジネスの収益基盤の強化が進展したことにより、営業収益は増収となりました。営業費用は、営業関連費用等の抑制に伴う物件費の減少および利息返還損失引当金の戻し入れによりクレジットコストが減少した一方で、市場金利上昇に伴う金融費用の増加により、全体としては増加となりました。営業収益の増加が営業費用の増加を上回ったことから、営業利益、経常利益および親会社株主に帰属する当期純利益はいずれも増益となりました。

当社の経営成績に重要な影響を与える要因としましては、貸倒引当金繰入額の増加や利息返還損失引当金の追加引当が挙げられます。

貸倒引当金につきましては、自己破産や企業倒産の増加など信用リスクの増大により、貸倒損失が想定を上回り、貸倒引当金繰入額が増加する可能性があります。引き続き厳格な与信運営と管理体制の高度化・効率化による回収強化に取り組み、貸倒引当金繰入額の抑制に努めてまいります。

利息返還損失引当金につきましては、利息返還実績の減少により、経営成績への影響は限定的になりつつあるものの、引き続きその動向には注視してまいります。

セグメントごとの財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容は、「(1)経営成績等の状況の概要 財政状態および経営成績の状況」に記載のとおりです。

キャッシュ・フローの状況の分析・検討内容ならびに資本の財源および資金の流動性に係る情報

当社グループの資金調達につきましては、金融機関からの短期借入、長期借入のほか、短期社債、債権流動化などを活用し、調達手段を多様化しております。運転資金や短期の営業債権に対応する調達は、短期借入や短期社債を活用して機動的に運営する一方、長期の営業債権に対応する調達は、長期借入や債権流動化などを活用することで安定的な資金運営に努めております。

キャッシュ・フローの状況の分析・検討内容は、「(1)経営成績等の状況の概要 キャッシュ・フローの状況」に記載のとおりです。

重要な会計上の見積りおよび当該見積りに用いた仮定

連結財務諸表の作成に当たって用いた会計上の見積りおよび当該見積りに用いた仮定のうち、重要なものについては、「第5 経理の状況 1. 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項 (重要な会計上の見積り)」に記載のとおりであります。

5【重要な契約等】

財務上の特約が付された金銭消費貸借契約

当連結会計年度末において、当社が締結している財務上の特約が付された金銭消費貸借契約は次のとおりであります。

また、金銭消費貸借契約は、同種の財務上の特約が付されたものについてはそれぞれ合算しております。

(1) 契約締結日

2025年8月27日～2026年3月27日

(2) 金銭消費貸借契約の相手方の属性

その他銀行、地域金融機関等

(3) 金銭消費貸借契約に係る債務の期末残高及び弁済期限並びに当該債務に付された担保の内容

債務の期末残高 153億円

弁済期限 2028年8月31日～2029年3月30日

当該債務に付された担保の内容 該当事項はありません。

(4) 財務上の特約の内容

各年度の貸借対照表及び中間貸借対照表における純資産額を、2025年3月期末の純資産合計の75%以上に維持すること。

各年度の損益計算書における経常損益を、2期連続して負の値としないこと。

株式会社格付投資情報センターによる単体の発行体格付を「BBB - 」以上に維持すること。

6【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

該当事項はありません。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

当社における主要な設備は、次のとおりであります。

2026年3月31日現在

事業所名	所在地	帳簿価額（百万円）					従業員数 （人）	
		建物	構築物	その他	土地			合計
					面積 （㎡）	金額		
東京本部	東京都中央区	666	-	107	-	-	774	337 (51)
大阪事務所 （本店所在地）	大阪市浪速区	20	-	175	-	-	196	137 (60)
営業店・センター等	-	452	3	931	2,411	161	1,548	736 (256)

（注）1．当社ではセグメントごとに設備等を有していません。

2．上記のうち、主な事業所の年間賃借料は、次のとおりであります。

東京本部 625百万円

大阪事務所 163百万円

3．従業員数欄の（ ）内は、臨時従業員の年間平均雇用人員であり、外数であります。

4．帳簿価額のうちその他は、器具備品1,064百万円、建設仮勘定150百万円であります。

5．上記にはソフトウェア資産19,301百万円は含まれておりません。

(2) 国内子会社

該当事項はありません。

3【設備の新設、除却等の計画】

当連結会計年度末現在における重要な設備の新設計画は次のとおりであります。

会社名	セグメントの 名称	設備の内容	投資予定額		資金調達方法	着手及び完了予定年月	
			総額 （百万円）	既支払額 （百万円）		着手	完了
(株)アプラス	ショッピング クレジット	基幹業務システム	12,870	1,256	借入金等	2025年7月	2028年11月

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	10
計	10

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (2026年3月31日)	提出日現在発行数(株) (2026年6月29日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	1	1	非上場	単元株式数 1株 (注)
計	1	1	-	-

(注) 当社の株式を譲渡により取得するには、取締役会の承認を要する旨定款に定めております。

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数 増減数(株)	発行済株式総数 残高(株)	資本金 増減額 (百万円)	資本金 残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2022年1月1日(注)1	1	3	110	15,110	27	3,777
2022年1月31日(注)2	2	1	-	15,110	-	3,777
2022年3月30日(注)3	-	1	15,010	100	-	3,777
2024年3月15日(注)4	-	1	-	100	3,752	25

(注)1. 当社を存続会社、株式会社アプラスフィナンシャルを消滅会社とする吸収合併を行ったことにより、普通株式1株を新たに発行しております。また、資本金および資本準備金が増加しております。

(注)2. 消却したことにより減少しております。

(注)3. 減資したことにより減少しております。

(注)4. 今後の資本政策の柔軟性・機動性を確保することを目的に、会社法第448条第1項に基づき、その他資本剰余金に振り替えたものであります。

(5)【所有者別状況】

2026年3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数 1株）							単元未満株式の状況（株）	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数（人）	-	1	-	-	-	-	-	1	-
所有株式数（単元）	-	1	-	-	-	-	-	1	-
所有株式数の割合（％）	-	100.00	-	-	-	-	-	100.00	-

(6)【大株主の状況】

2026年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数（株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合（％）
株式会社SBI新生銀行	東京都中央区日本橋室町二丁目4番3号	1	100.00
計	-	1	100.00

(7)【議決権の状況】

【発行済株式】

2026年3月31日現在

区分	株式数（株）	議決権の数（個）	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式（自己株式等）	-	-	-
議決権制限株式（その他）	-	-	-
完全議決権株式（自己株式等）	-	-	-
完全議決権株式（その他）	普通株式	1	1
単元未満株式	-	-	-
発行済株式総数	1	-	-
総株主の議決権	-	1	-

【自己株式等】

普通株式

2026年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数（株）	他人名義所有株式数（株）	所有株式数の合計（株）	発行済株式総数に対する所有株式数の割合（％）
-	-	-	-	-	-
計	-	-	-	-	-

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 該当事項はありません。

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

該当事項はありません。

3【配当政策】

配当につきましては、財務体質の強化および将来の事業展開への備え、当社を取り巻く事業環境などを総合的に勘案し、中長期的な視点にたって安定的な利益還元を行うことを基本方針としております。

当社は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としております。

これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。当社は、「取締役会の決議により、毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めております。

当連結会計年度の普通株式の剰余金配当につきましては、内部留保による財務基盤の強化を図るとともに自己資本の充実に努めることから、誠に遺憾ながら無配とさせていただきました。

内部留保資金につきましては、収益基盤の強化および財務体質の強化のために効果的に活用してまいります。

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスの状況につきましては、連結会社の企業統治に関する事項について記載しております。

会社の機関の内容および内部統制システムの整備の状況等

当社グループは、経営監視機能の強化およびコンプライアンス体制の充実による経営の健全性を保持し、経営環境の変化への迅速な対応および経営効率の向上を図ることをコーポレート・ガバナンスに関する基本方針としております。

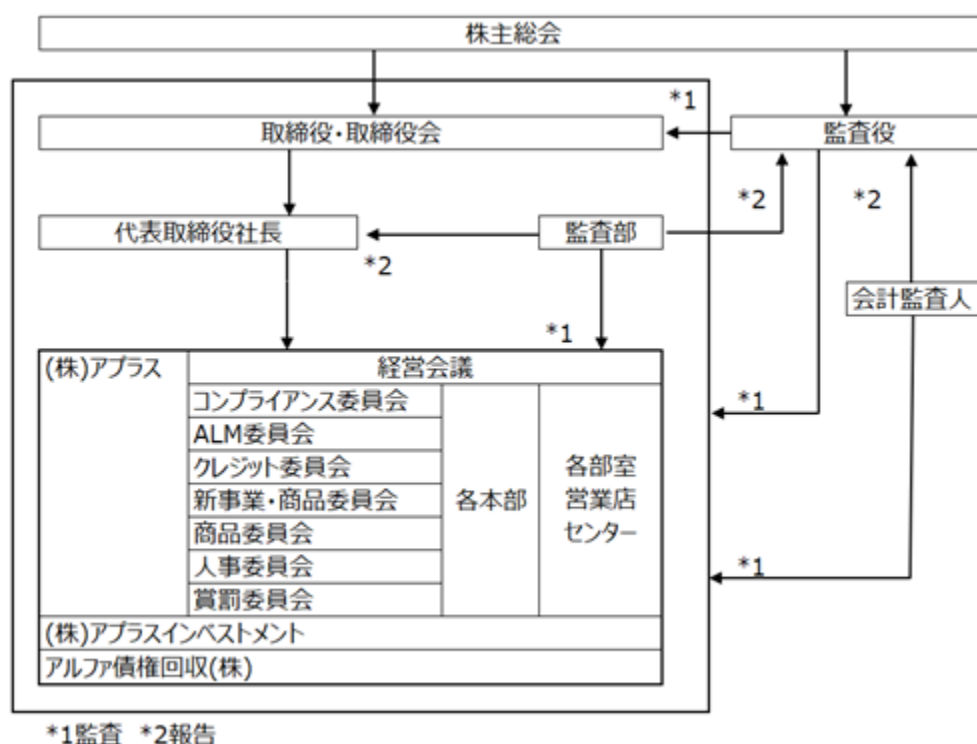
当社は、取締役会および監査役を設置し、委員会設置会社に代表される業務執行と監督機能を組織的に分離せず、監査役を設置を前提として、取締役会が監督機能を有する体制とすることでその実効性を高め、コーポレート・ガバナンス体制の充実を図れるよう、現在の体制を選択しております。

取締役会については、3ヵ月に1回以上、必要に応じて開催されており、経営の重要事項を決定するとともに、業務の執行状況を監督しております。本有価証券報告書提出日時点における当社の取締役は、代表取締役嶋田貴之、取締役谷裕一、取締役平沢晃、取締役大里有光、取締役湯淺良弘、取締役山田知弘の6名であります。

経営監視機能として、当社は監査役を設置した監査役制度を採用しており、監査役が取締役会やその他の主要な会議への出席や意見具申を通じ監視機能を果たしております。本有価証券報告書提出日時点における当社の監査役は、監査役富田昌義、監査役下村大作の2名であります。

当社の組織は、本部制を採用し、業務執行のスピードアップを図るとともに、その成果と責任を明確にしております。

当社グループの経営上の意思決定、執行および監督に係る業務執行組織、その他コーポレート・ガバナンス体制の概要は、次のとおりであります。



内部統制システムの整備状況については、2010年1月に取締役の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制、ならびにその他業務の適正を確保するために必要な体制の整備（内部統制システムの構築）に関する基本方針として「内部統制規程」を制定し、法令遵守およびリスク管理を確保するための社内体制を整備しております。

2017年4月1日付で、当社親会社である株式会社SBI新生銀行（以下、「SBI新生銀行」という。）は、SBI新生銀行グループ各社の間接機能の統合・一体運営を図るため、SBI新生銀行内に「グループ本社」を設置いたしました。これにより、各間接機能の高度化とグループガバナンスの強化を図るとともに、SBI新生銀行グループ各社で重複する機能を集約することで、生産性・効率性の向上を目指し、当社におきましても、人事、財務、総務、コンプライアンス等の各間接機能の業務を順次見直しました。

2022年1月1日付で当社を存続会社、親会社であった株式会社アプラスフィナンシャルを消滅会社とする吸収合併契約を行い、これに伴う措置として、新たに当社内に「コンプライアンス委員会」を設置し、当社独自のコンプライアンス体制の整備を行いました。

コンプライアンス体制については、「コンプライアンス委員会」および「コンプライアンス部」を設置するとともに複数の顧問弁護士と連携し、法令遵守の観点からチェック体制を整備しております。また、コンプライアンスに関するマニュアルを制定し、社員への教育および啓蒙を徹底しております。役職員のコンプライアンス問題については、コンプライアンスホットライン制度により、グループ全体の通報状況、対応状況を把握しております。

反社会的勢力への対応については、具体的な事案が発生した場合の対応・報告の基準を示しております。経営への報告体制は、反社会的勢力との取引が発覚した場合の経営責任者への即時報告、月次での反社会的勢力排除のための取組みに係る経営責任者への報告について、取締役会およびコンプライアンス委員会にて報告することを規定しております。個別取引与信、取引先取引与信等については、反社会的勢力への対応強化および排除のため、外部機関との提携を進め、断固として反社会的勢力との関係を遮断し、排除することとしております。反社会的勢力との取引・関与、不当要求行為を受けた場合の具体的な手順および心得等は、各種マニュアルを整備し、排除のための取組み実施にあたり、適正な業務運営を確保するとともに、反社会的勢力排除に向けた対応の周知徹底を図っております。個別事案に関しては、必要に応じ、警察・顧問弁護士とも連携し、毅然とした対応をとっております。

リスク管理体制の整備状況

リスク管理体制の整備状況については、当社グループの業務運営に係るリスクとその管理部署を明確にし、各リスクの管理規程を制定する等、リスク管理を恒常的に行う体制の整備およびその円滑な運営等に努めております。また、当社は、「コンプライアンス委員会」、「ALM委員会」、「クレジット委員会」、「新事業・商品委員会」、「商品委員会」、「人事委員会」、「賞罰委員会」を設置し、相互の連携を密に行うことで適切な内部統制システムの構築と経営監視機能の充実を図っております。

子会社の業務の適正性を確保するための整備状況

当社グループは、SBI新生銀行グループ全体のリスク管理体制やコンプライアンス体制と整合性を持った業務運営を確保すべく、主管部署がグループ各社の経営全般の管理または指導を行っております。当社子会社の取締役および従業員の職務執行に係る事項の報告に関しては、「子会社・関連会社管理規程」および「業務分掌ならびに決裁権限規程」に基づき行っております。当社子会社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保することに関しては、子会社の自主性を尊重するため子会社の取締役会等で協議するものとし、業務の内容に応じて当社と事前協議を行っております。当社子会社の損失の危険の管理に関しては、それぞれの対応部署にて定める各諸規程類によって管理しており、「内部監査規程」により子会社毎のリスク管理の運用状況を監査し、その結果をリスク管理体制へ反映させております。

当社子会社の取締役および従業員の職務の執行が法令および定款に適合することの確保に関しては、子会社の規模その他に応じて監査役を設置するとともに、当社または子会社におけるコンプライアンス関連の規程等により、コンプライアンス遵守状況の監視および徹底を図っております。

役員の報酬の内容

ア．役員報酬等またはその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社は、役員報酬等の額またはその算定方法の決定に関する方針を定めておりません。当社の役員報酬の決定については、2021年12月21日開催の当社株主総会の決議により、取締役の報酬限度額を年額100百万円、監査役の報酬限度額を年額60百万円としております。

当社の役員報酬等の額の決定については、株主総会で決議された金額の範囲内で、取締役報酬については取締役会が社長に一任することが決議されており、監査役報酬については監査役協議会の協議により決定しております。なお、当社の役員報酬に業績連動報酬は含まれておりません。

イ．役員区分ごとの報酬等の総額、対象となる役員の員数

当連結会計年度における当社の取締役および監査役に対する役員報酬等は以下のとおりであります。なお、個人別の報酬等の総額について記載すべき内容はありません。

役員区分	支給人数 (名)	報酬等の総額(基本報酬) (百万円)
取締役 (うち社外取締役)	3 (0)	5 (0)
監査役 (うち社外監査役)	2 (0)	26 (0)
合計 (うち社外役員合計)	5 (0)	31 (0)

- (注) 1．当連結会計年度末時点での在任は、取締役6名および監査役3名であります。当連結会計年度における報酬等支給人数は、取締役3名および監査役2名であります。上記報酬支給人数には、2025年6月26日開催の当社定時株主総会をもって退任した取締役1名を含んでおります。
- 2．当社は、2013年3月31日をもって役員退職慰労金制度を廃止しております。
- 3．当連結会計年度において、上記以外のストックオプションおよび賞与等の支給はありません。

取締役の定数

当社は、取締役の定数について、25名以内とする旨を定款に定めております。

取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨および累積投票によらない旨を定款に定めております。

剰余金の配当の決定機関

当社は、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議により、毎年9月30日の最終の株主名簿に記載または記録されている株主もしくは登録株式質権者に対し、中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。これは、株主への事業年度中における還元を行うことを目的とするものであります。

株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

取締役会の活動状況

氏名	地位	出席状況
嶋田 貴之	代表取締役	100% (15回中15回)
谷 裕一 (注) 1	取締役	100% (11回中11回)
三富 彰雄 (注) 1	取締役	90% (11回中10回)
鍵田 裕之	取締役	100% (15回中15回)
平沢 晃	取締役	100% (15回中15回)
大里 有光	取締役	93% (15回中14回)
富田 昌義 (注) 2	代表取締役	100% (4回中4回)
伊勢 康永 (注) 2	取締役	100% (4回中4回)

(注) 1 . 谷裕一、三富彰雄については、2025年6月の就任以降に開催された取締役会における出席状況であります。

2 . 富田昌義、伊勢康永については、2025年6月26日付で退任しております。

取締役会については、3ヵ月に1回以上、必要に応じて開催されており、経営の重要事項を決定するとともに、業務の執行状況を監督しております。

2025年度については、取締役会規則に定める付議基準に該当する事項の審議や業務執行にかかる運営状況報告の他、システム重要案件、お客さまの声、リスク管理のほか、内部監査やコンプライアンス関連事項についても、執行側から取締役会に定期的な報告を実施しております。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性 8名 女性 0名 (役員のうち女性の比率 0%)

役職名	氏名	生年月日	略歴(注) 1	任期	所有株式数 (千株)
取締役社長 (代表取締役) 最高経営責任者	嶋田 貴之	1967年 5月27日生	1991年 6月 株式会社大信販入社 2015年 6月 当社営業統括部長兼事業部門副本部長 2016年 6月 当社執行役員事業部門副本部長兼営業統括部長兼市場開発部長兼営業本部長 2019年 7月 当社常務執行役員事業統括本部長兼カード事業本部長兼営業統括部長 2020年 7月 当社取締役常務執行役員クレジット推進本部長兼営業統括部長 2021年 4月 当社専務執行役員クレジット推進本部長兼営業統括部長 2022年 6月 当社代表取締役社長社長執行役員(現任) 2025年 6月 株式会社シー・アイ・シー取締役(現任)	(注) 2	-
取締役	谷 裕一	1971年 1月 7日生	1993年 4月 株式会社アプラス入社 2015年 7月 当社財務部部付部長 2019年 7月 当社総合管理部部付部長 2020年 6月 当社執行役員総合管理部長 2023年 4月 当社常務執行役員総合管理本部長兼企業戦略部長 2024年 7月 当社常務執行役員総合管理本部長兼企業戦略部長兼戦略企画室長 2025年 6月 当社取締役常務執行役員総合管理本部長兼企業戦略部長兼戦略企画室長 2026年 4月 当社取締役常務執行役員財務管理本部長兼総合管理本部長兼企業戦略部長兼戦略企画室長(現任)	(注) 2	-
取締役	平沢 晃	1963年 5月29日生	1987年 4月 株式会社日本長期信用銀行(現株式会社SBI新生銀行)入行 2016年11月 同行常務執行役員コーポレートサービス総括兼グループ組織戦略総括兼人事部長 2016年12月 当社取締役(現任) 2022年 5月 株式会社新生銀行(現株式会社SBI新生銀行)専務執行役員 管掌グループ経営企画、グループ人事、グループ法務・コンプライアンス、グループ総務、グループリスク、グループIT、業務管理担当(現任)	(注) 2	-
取締役	大里 有光	1976年12月 6日生	2002年 4月 株式会社新生銀行(現株式会社SBI新生銀行)入行 2022年 1月 同行執行役員法人営業担当兼シニアオフィサーグループ企画財務グループ経営企画部(特命) 2022年 4月 同行執行役員グループ戦略企画部長 2022年 4月 当社取締役(現任) 2022年11月 株式会社新生銀行(現株式会社SBI新生銀行)執行役員グループ戦略企画部長兼グループ経営企画担当 2026年 4月 同行常務執行役員グループ戦略企画担当兼グループ経営企画担当(現任)	(注) 2	-
取締役	湯浅 良弘	1967年 9月25日生	1990年 4月 株式会社千葉銀行入行 2000年 8月 住友信託銀行株式会社(現三井住友信託銀行株式会社)入行 2020年 4月 同行理事難波支店長兼難波中央支店長 2022年 4月 株式会社エスクロー・エージェント・ジャパン入社 執行役員不動産事業本部長 2023年 7月 株式会社SBI新生銀行入行 エグゼクティブアドバイザー兼住宅ローン部部付部長 2024年 4月 同行執行役員リテール戦略担当兼住宅ローン担当 2025年 4月 同行常務執行役員個人営業担当 2026年 4月 同行常務執行役員個人営業総括(現任) 2026年 4月 当社取締役(現任)	(注) 2	-

役職名	氏名	生年月日	略歴(注) 1	任期	所有株式数 (千株)
取締役	山田 知弘	1980年10月10日生	2006年4月 株式会社NOVA入社 2008年4月 株式会社新生銀行(現株式会社SBI新生銀行)入行 2023年4月 同行住宅ローン部付部長 2023年9月 アクセンチュア株式会社入社 2024年4月 株式会社MFS入社 執行役員兼パートナー事業部長兼住宅ローン事業部長 2025年3月 株式会社SBI新生銀行入行 住宅ローン部付部長 2025年4月 同行住宅ローン部長 2026年4月 同行グループ個人企画部長(現任) 2026年4月 当社取締役(現任)	(注) 2	-
監査役	富田 昌義	1964年6月8日生	1988年4月 株式会社日本長期信用銀行(現株式会社SBI新生銀行)入行 2016年4月 同行執行役員個人担当兼個人企画部長 2016年6月 当社監査役 2019年4月 株式会社新生銀行(現株式会社SBI新生銀行)執行役員個人ビジネス担当 2020年6月 当社参与 2020年6月 当社取締役常務執行役員 2021年4月 当社専務執行役員信用リスク管理本部長 2022年6月 当社代表取締役副社長 2025年6月 当社監査役(現任)	(注) 3	-
監査役	下村 大作	1959年10月7日生	1984年4月 株式会社日本長期信用銀行(現株式会社SBI新生銀行)入行 2012年7月 同行総務部長 2012年7月 新生ビジネスサービス株式会社(現SBI新生ビジネスサービス株式会社)代表取締役社長 2017年4月 新生信託銀行株式会社(現SBI新生信託銀行株式会社)社外監査役(現任) 2024年6月 当社監査役(現任)	(注) 4	-
計					-

- (注) 1. 株式会社新生銀行は2023年1月4日付で商号を株式会社SBI新生銀行へ変更しております。
2. 2026年6月26日から2027年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
3. 2025年6月26日から2029年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
4. 2026年6月26日から2030年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。

社外役員の状況

当社は社外役員を選任しておりません。

(3)【監査の状況】

監査役監査の状況

当社の監査役は、本有価証券報告書提出日時点において、金融機関での業務が長く財務および会計に関する知見を有する監査役2名で構成され、それぞれの持つ専門性とコーポレート・ガバナンス等に関する知見をもとに、取締役会から独立した立場で業務執行の監査を行っております。

監査役監査については、3ヶ月に1回以上、また必要に応じて開催される「取締役会」に出席し、取締役による業務執行の意思決定などが適正になされているか監査を行っております。また、その他重要な会議等への出席や必要に応じて主要な事業所等への往査を行っております。

当連結会計年度における監査役協議会の開催回数は16回です。また、監査役協議会への監査役の出席状況および主な活動内容は、次のとおりです。

氏名	地位	主な活動状況
松本 恭平 (注)	常勤監査役	当社監査役協議会16回のうち16回に出席し、金融機関業務の経験に基づき、議案審議等に適切な発言・提言を行っております。
富田 昌義	常勤監査役	2025年6月26日就任以降、当社監査役協議会10回のうち10回に出席し、金融機関業務の経験に基づき、議案審議等に適切な発言・提言を行っております。
下村 大作	監査役	当社監査役協議会16回のうち16回に出席し、金融機関業務の経験に基づき、議案審議等に適切な発言・提言を行っております。

(注)2026年6月26日開催の定時株主総会終結の時をもって任期満了により退任しております。

監査役協議会では、業務執行取締役、ビジネス部門および間接部門の担当役員・本部長等、ならびに子会社の社長・部長等から所管する業務の執行状況や内部統制システムの運用状況、サステナビリティ活動について報告を求め、意見交換を行っております。また、監査部からは内部監査状況等につき毎回の監査役協議会において報告を受け意見交換を行っております。常勤監査役は協議会議長として、代表取締役社長との意見交換、取締役会、経営会議、コンプライアンス委員会、ALM委員会等の重要会議への出席、コンプライアンス部等の内部統制部署からの報告、重要書類の閲覧、子会社社長および監査役との意見交換、営業店・センター等への往査活動のほか、会計監査人、監査部との月次での意見交換等により当社グループの状況を把握し、その状況を監査役間で共有、議論のうえ、業務運営状況の監視を行っております。

内部監査の状況

当社の監査部は、取締役社長と監査役に監査結果および監査部の活動状況を定期的に直接報告します。監査部は、取締役社長の業務管理責任の遂行、特に有効な内部統制システムを確立する責任の遂行を補佐するとともに、監査役の職務の遂行、特に監査役監査として行われる内部統制システムの構築および運用状況の監視検証を補佐します。監査部はリスク管理およびガバナンス体制の有効性、情報およびITシステムの信頼性ならびに法令規則等の遵守性について、独立した客観的立場から評価するとともに、経営のためのソリューションを提供します。監査部は取締役会に対し年次の監査部の活動報告を行います。監査部はまた、会計監査人と定期的および必要に応じて意見交換を行い、監査機能の有効性・効率性を高めるために相互に連携することに努めております。

監査部は、監査対象となるすべての組織から独立しており、また、定型的な予防的・発見的コントロールを含むあらゆる日常業務および内部管理プロセスから独立しています。

監査の方法は、リスクアプローチを採用しており、当社グループが直面するリスクを全社的視点からとらえたマクロリスク評価と、各部店固有のリスクを個別にとらえたマイクロリスク評価との組み合わせにより、包括的なリスク評価を行っております。相対的にリスクが大きいと考えられる業務やプロセスに対しては、優先的に監査資源を投入しております。

内部監査の有効性・効率性を高めるためには、業務部署の情報収集が重要です。監査部では、重要な会議への出席や内部管理資料の閲覧および各業務部署のマネジメントと必要に応じて会合を行うなど、日常的なオフサイトモニタリング機能を充実させております。

監査部は、2026年3月末現在の人員は8名です。監査部では、監査要員の専門性向上のため、公認内部監査人等の資格取得も精力的に行っております。

会計監査の状況

ア．監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

イ．継続監査期間

2010年3月期以降

ウ．業務を執行した公認会計士

小野 大樹氏

野根 俊和氏

エ．監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士13名、公認会計士試験合格者3名、その他30名であります。

オ．監査法人の選定方針と理由

監査役は、「会計監査人の選定基準」を設け、会計監査人の独立性および品質管理体制の適切性が確保されているかを基準に、会計監査人を選定する方針です。有限責任監査法人トーマツにおいては、当社選定基準を満たしており、再任しております。

また、監査役は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める事項のいずれかに該当すると認める場合は、監査役全員の同意をもって会計監査人を解任する方針です。

なお、監査役は、会計監査人が継続してその職責を全うするうえで重要な疑義を抱く事象が発生した場合には、会計監査人の解任または不再任を目的とする株主総会議案の内容を決定します。

カ．監査役による監査法人の評価

監査役は、会計監査人が独立の立場を保持し、かつ、適正な監査を実施しているかを監視および検証するとともに会計監査人からその職務の執行状況について報告を受け、監査の方法および結果が相当であると評価しております。

監査報酬の内容等

ア．監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	137	-	138	-
連結子会社	9	-	9	-
計	146	-	148	-

（前連結会計年度）

当社および連結子会社における非監査業務に基づく報酬はありません。

（当連結会計年度）

当社および連結子会社における非監査業務に基づく報酬はありません。

イ．監査公認会計士等と同一のネットワークに属する組織に対する報酬（ア．を除く）

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	-	-	-	-
連結子会社	-	-	-	-
計	-	-	-	-

（前連結会計年度）

当社および連結子会社における非監査業務に基づく報酬はありません。

（当連結会計年度）

当社および連結子会社における非監査業務に基づく報酬はありません。

ウ．その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

エ．監査報酬の決定方針

該当事項はありませんが、監査日程等を勘案した上で決定しております。

オ．監査役が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役は、会計監査人から提出のあった当該年度監査計画および昨年度の報酬実績等を確認し検討した結果、会計監査人の報酬等につき、合理性・相当性があるものと判断いたしました。

（４）【役員の報酬等】

当社は非上場会社でありますので、記載すべき事項はありません。

なお、役員報酬の内容につきましては、「４ コーポレート・ガバナンスの状況等 （１）コーポレート・ガバナンスの概要」に記載しております。

（５）【株式の保有状況】

当社は非上場会社でありますので、記載すべき事項はありません。

5【従業員の状況等】

(1)【人材戦略に関する基本方針等】

SBI新生銀行グループは、人材こそが新たなビジネスの創出や競争力の維持・向上、ならびに組織の持続的な成長を支える源泉であるとの認識のもと、人材を特定のビジネスや組織の枠にとらわれないグループ共通の重要な経営資源と位置付けています。この考え方のもと、グループの経営理念および中期経営計画に掲げるビジョンの実現に向けて、人材を採用、育成し、活躍を図るべく、人事制度および人事施策の整備・運用を行っています。

人的資本拡充に向けては、高付加価値なビジネスの創出を支える専門性および実行力を備えた人材の確保・育成を重視し、キャリアを明確化した採用を行い、能力の発揮を促すキャリアパスの整備、処遇を行っています。あわせて、従業員を育成し、活躍を促すために、透明性および客観性の高い制度に基づき、短期的な成果にとどまらず、中長期的な視点での貢献や業務基盤の構築に向けた取り組みを含めて評価制度を整備し、研修その他の能力開発の機会を設けています。

従業員の処遇は、原則として各人の役割期待及び業績評価に応じて決定します。役割期待は、年功によらず、各人の職務や役割の重要度、貢献度、能力等に対する公正な評価を踏まえて決定します。そのうえで、SBI新生銀行グループ全体および各人の所属する組織の業績、マーケット水準等を踏まえて処遇（報酬）に反映することを基本的な考え方としています。

また、組織としての必要性および育成の観点から踏まえた人材配置や、グループ内外における柔軟な連携を通じて、組織的な能力の強化および活用を図っています。あわせて、多様なバックグラウンドや価値観を持つ人材が、それぞれの能力を最大限発揮できる環境づくりや、柔軟な働き方を支える制度の整備に取り組んでいます。さらに、従業員の心身の健康の保持や、健全で働きやすい職場環境の確保を重要な基盤と捉え、安全・衛生への配慮やハラスメントの防止を含む各種施策を通じて、安心して働くことができる環境の整備に努めています。

(2)【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2026年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数（人）
(株)アプラス	1,210 (367)
(株)アプラスインベストメント	13 (26)
アルファ債権回収(株)	85 (48)
合計	1,308 (441)

- (注) 1. 従業員数は、就業人員であります。
2. ()内は、臨時従業員の年間平均雇用人員であり、外数であります。
3. 当社では、セグメントごとの従業員数を有しておりません。

(2) 提出会社の状況

2026年3月31日現在

従業員数（人）	平均年齢（歳）	平均勤続年数（年）	平均年間給与（円）	平均年間給与との対前事業年度増減率（%）
1,210 (367)	41.8	15.3	6,311,332	2.4

- (注) 1. 従業員数は、就業人員であります。
2. 平均年間給与は、賞与および基準外賃金を含んでおります。
3. 当社では、セグメントごとの従業員数を有しておりません。

(3) 労働組合の状況

当社には労働組合が組織されております。
なお、労使関係について特記すべき事項はありません。

(4) 管理的地位にある労働者に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業等取得率及び労働者の男女の賃金の額の差異

提出会社

管理的地位にある労働者に占める女性労働者の割合 (注) 1、2	男性労働者の育児休業等取得率 (注) 1、3	労働者の男女の賃金の額の差異(注) 1、2、4		
		全労働者	うち正規雇用労働者	うちパート・有期労働者
25.9%	140%	56.4%	67.0%	33.9%

- (注) 1. 集計の前提となる人員数については、他社への出向者を含み、他社からの出向者を含んでおりません。
2. 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。
3. 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の6第2号における育児休業等及び育児目的休暇の取得割合を算出しております。育児休業については、対象の子が2歳となる前日までの間の休業を当連結会計年度に開始した者の数を、育児目的休暇については、配偶者の妊娠時から子が満2歳となるまでの間に取得することができる休暇(「はぐくみ休暇」)について、当連結会計年度に初めて取得した者の数を、当連結会計年度において配偶者が出産した男性労働者数で除することによって算出しております。このため算出結果が100%超となることがあります。
4. 当社において、同一の職務・役割を担い、同等の評価を受けている従業員間において、性別による賃金差は生じておりません。一方で、全体としては男女の賃金の額の差異がみられており、その主な要因は 管理的地位にある労働者に占める女性比率が低いこと、ならびに 男女の労働時間に差があることの二点が挙げられます。 については、女性管理職比率の向上に関する数値目標を設定し、性別にかかわらず公正な採用・登用を推進しております。また、将来の管理職候補となる女性人材を把握したうえで、計画的な育成や役割付与を行うとともに、育児休業からの円滑な職場復帰支援を充実させること等により、キャリアの中断を抑制し、継続的な成長を支援する環境整備に取り組んでおります。 については、正規雇用労働者における短時間勤務制度利用者の半数以上が女性であることに加え、パート・有期労働者である短時間労働者においても女性比率も高いことが影響しております。SBI新生銀行グループでは、すべての従業員がライフステージに応じて最適な働き方を選択し、能力を発揮し続けることができるよう、環境整備に取り組んでおります。これらの取り組みを通じて、結果として男女間の賃金格差の縮小を図ってまいります。

連結子会社

連結子会社は、「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)および「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定による公表義務の対象ではないため、記載を省略しております。

第5【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）に基づいて作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2025年4月1日から2026年3月31日まで）の連結財務諸表および事業年度（2025年4月1日から2026年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組について

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組を行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構に加入し、同機構の行うセミナーに参加しております。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	88,004	98,917
割賦売掛金	1,231,186,400	1,231,167,212
信用保証割賦売掛金	1,662,831	1,682,016
リース投資資産	184,859	191,819
金銭の信託	471,673	467,467
その他	40,646	39,694
貸倒引当金	59,202	62,037
流動資産合計	2,075,215	2,085,090
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物(純額)	974	1,197
土地	161	161
建設仮勘定	-	150
その他(純額)	634	1,121
有形固定資産合計	5,1769	5,2630
無形固定資産		
のれん	43	-
ソフトウェア	6,19,071	6,19,368
無形固定資産合計	19,114	19,368
投資その他の資産		
投資有価証券	7,268	7,280
退職給付に係る資産	12,654	15,456
繰延税金資産	5,164	7,292
その他	4,016	6,154
投資その他の資産合計	22,104	29,184
固定資産合計	42,988	51,183
資産合計	2,118,203	2,136,274

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	19,211	16,920
信用保証買掛金	662,831	682,016
短期社債	16,000	35,000
短期借入金	695,100	392,310
1年内返済予定の長期借入金	49,951	75,961
リース債務	18,888	20,940
未払法人税等	1,504	2,430
賞与引当金	2,488	2,850
ポイント引当金	2,754	3,027
預り金	149,134	160,749
割賦利益繰延	8 46,878	8 48,783
その他	8,986	5,633
流動負債合計	1,673,729	1,446,624
固定負債		
長期借入金	218,538	366,998
長期債権流動化債務	3 80,593	3 156,071
リース債務	65,971	70,878
利息返還損失引当金	4,680	3,592
その他	1,139	1,573
固定負債合計	370,923	599,114
負債合計	2,044,652	2,045,739
純資産の部		
株主資本		
資本金	100	100
資本剰余金	25	25
利益剰余金	69,172	85,160
株主資本合計	69,297	85,285
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	0	2
土地再評価差額金	86	86
退職給付に係る調整累計額	4,339	5,334
その他の包括利益累計額合計	4,253	5,249
純資産合計	73,550	90,535
負債純資産合計	2,118,203	2,136,274

【連結損益及び包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
営業収益		
事業収益	1, 2 94,936	1, 2 106,479
その他の営業収益	103	156
営業収益合計	95,039	106,635
営業費用		
販売費及び一般管理費	3 80,813	3 77,240
金融費用		
支払利息	5,907	11,164
その他	341	463
金融費用合計	6,249	11,628
営業費用合計	87,063	88,869
営業利益	7,976	17,766
営業外収益		
企業結合に係る特定勘定取崩益	27	-
受取精算金	13	19
持分法による投資利益	-	9
雑収入	45	47
営業外収益合計	85	76
営業外費用		
固定資産売却損	-	5
固定資産除却損	15	12
雑損失	39	9
営業外費用合計	54	27
経常利益	8,006	17,815
税金等調整前当期純利益	8,006	17,815
法人税、住民税及び事業税	4,524	4,503
法人税等調整額	4,537	2,675
法人税等合計	13	1,827
当期純利益	8,020	15,987
(内訳)		
親会社株主に帰属する当期純利益	8,020	15,987
非支配株主に帰属する当期純利益	-	-
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	0	1
退職給付に係る調整額	1,323	995
その他の包括利益合計	4 1,323	4 996
包括利益	9,343	16,984
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	9,343	16,984
非支配株主に係る包括利益	-	-

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2024年4月1日 至 2025年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本			
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	株主資本合計
当期首残高	100	25	61,151	61,276
当期変動額				
親会社株主に帰属する当期純利益			8,020	8,020
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）				
当期変動額合計	-	-	8,020	8,020
当期末残高	100	25	69,172	69,297

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額 金	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計	
当期首残高	0	86	3,015	2,930	64,206
当期変動額					
親会社株主に帰属する当期純利益					8,020
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	0	-	1,323	1,323	1,323
当期変動額合計	0	-	1,323	1,323	9,343
当期末残高	0	86	4,339	4,253	73,550

当連結会計年度（自 2025年4月1日 至 2026年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本			
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	株主資本合計
当期首残高	100	25	69,172	69,297
当期変動額				
親会社株主に帰属する当期純利益			15,987	15,987
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）				
当期変動額合計	-	-	15,987	15,987
当期末残高	100	25	85,160	85,285

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額 金	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計	
当期首残高	0	86	4,339	4,253	73,550
当期変動額					
親会社株主に帰属する当期純利益					15,987
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	1	-	995	996	996
当期変動額合計	1	-	995	996	16,984
当期末残高	2	86	5,334	5,249	90,535

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	8,006	17,815
減価償却費	3,966	4,073
のれん償却額	440	43
固定資産売却損益(は益)	-	4
固定資産除却損	15	12
貸倒引当金の増減額(は減少)	5,323	2,835
利息返還損失引当金の増減額(は減少)	523	1,087
受取利息及び受取配当金	1,044	1,262
支払利息	5,935	11,186
持分法による投資損益(は益)	1	9
売上債権の増減額(は増加)	154,789	27,536
仕入債務の増減額(は減少)	7,077	4,712
その他	2,228	5,162
小計	127,820	60,698
利息及び配当金の受取額	1,044	1,262
利息の支払額	5,631	10,773
法人税等の支払額	5,751	3,914
営業活動によるキャッシュ・フロー	138,158	47,272
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	166	1,281
有形固定資産の売却による収入	-	1
無形固定資産の取得による支出	4,406	4,689
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による収入	281	-
その他	461	335
投資活動によるキャッシュ・フロー	4,752	6,306
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額(は減少)	22,500	302,790
短期社債の純増減額(は減少)	8,000	19,000
長期借入れによる収入	197,400	232,440
長期借入金の返済による支出	48,713	57,936
長期債権流動化借入れによる収入	29,901	106,370
長期債権流動化借入金の返済による支出	23,002	26,280
社債の償還による支出	10,000	-
財務活動によるキャッシュ・フロー	131,086	29,196
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	11,825	11,769
現金及び現金同等物の期首残高	113,718	101,893
現金及び現金同等物の期末残高	1 101,893	1 113,663

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

- (1) 連結子会社数 2社
- (2) 主要な連結子会社名
(株)アプラスインベストメント
アルファ債権回収(株)
- (3) 当連結会計年度中の減少 1社
当社を存続会社とする吸収合併によるもの (株)クリアパス

2. 持分法の適用に関する事項

- (1) 持分法を適用した関連会社の数 1社
- (2) 主要な持分法を適用した関連会社の名称 (株)USEN FINANCIAL
- (3) 持分法を適用しない関連会社はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

(ア) 市場価格のない株式等以外のもの

時価法を採用しております。

なお、評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定しております。

(イ) 市場価格のない株式等

移動平均法による原価法を採用しております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産

主として、定率法を採用しております。ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(附属設備を除く)ならびに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備および構築物については、定額法を採用しております。

無形固定資産

自社利用ソフトウェアは、社内における利用可能期間(5~15年)に基づく定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については債権の内容を検討し、必要額を計上しております。

なお、破綻先および実質破綻先に対する債権については、債権額から回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、当連結会計年度の金額は47,037百万円(前連結会計年度は44,634百万円)であります。

賞与引当金

従業員に対する賞与支給に充てるため、支給見込額を計上しております。

ポイント引当金

ポイント制度によりお客さまに付与したポイントの使用による費用負担に備えるため、当連結会計年度末における将来の費用負担見込額を計上しております。

利息返還損失引当金

将来の利息返還の請求に伴う損失に備えるため、過去の返還実績等を勘案した必要額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（11年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理することとしております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

収益の計上基準

営業収益の計上は、期日到来基準とし、次の方法によっております。

ショッピングクレジット事業、カード事業、ローン事業における収益は、契約方式により7・8分法、定額法、または残債方式によって収益を計上しております。

なお、カード事業における収益のうち、加盟店手数料およびカード年会費収入は「顧客との契約から生じる収益の計上基準」に従って計上しております。

(注) 計上方法の内容は次のとおりであります。

1. 7・8分法とは、手数料総額を分割回数の積数で按分し、各返済期日の到来のつど積数按分額を収益計上する方法であります。
2. 残債方式とは、元本残高に対して一定率の料率で手数料を算出し、各返済期日のつど算出額を収益計上する方法であります。

顧客との契約から生じる収益の計上基準

顧客との契約から生じる収益については、以下の5ステップに基づき収益を認識しております。

ステップ1：顧客との契約を識別する

ステップ2：契約における履行義務を識別する

ステップ3：取引価格を算定する

ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する

ステップ5：履行義務に充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する

顧客との契約から生じる収益のうち、主として、カード事業の代行手数料収入およびペイメント事業の集金代行収入については、これらの財又はサービスの提供完了時点において履行義務が充足されると判断して収益を認識しております。また、カード事業のカード年会費収入については、契約期間にわたりサービスを提供されるものであるため、時の経過に応じて履行義務が充足されると判断しており、役務を提供する期間にわたり収益を認識しております。

なお、これらの対価の額には重要な変動対価の見積りおよび金融要素は含まれておりません。

(6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、要求払預金および流動性が高く容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヵ月以内に満期日の到来する短期的な投資等からなっております。

(7) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

固定資産に係る控除対象外消費税等は、投資その他の資産の「その他」に計上し、5年間で均等償却を行っております。

グループ通算制度の適用

当社グループは、親会社である株式会社SBI新生銀行を通算親会社とするグループ通算制度を適用しておりました。

2025年7月31日付で、株式会社SBI新生銀行の親会社であるSBIホールディングス株式会社による完全支配関係が生じましたが、2025年12月17日付で、当該完全支配関係は解消されております。

これに伴い、2025年7月30日をもって、株式会社SBI新生銀行を通算親会社とするグループ通算制度の適用を取りやめ、以降は単体納税制度を適用しております。

関連する会計基準等の定めが明らかでない場合に採用した会計処理の原則および手続

債務保証のうち、当社が集金を行う債務保証（提携ローン保証および回収金保証）は、信用保証割賦売掛金および信用保証買掛金として計上しております。

(重要な会計上の見積り)

会計上の見積りにより当連結会計年度に係る連結財務諸表にその額を計上した項目であって、翌連結会計年度に係る連結財務諸表に重要な影響を及ぼす可能性があるものは、次のとおりであります。

1. 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	項目	前連結会計年度	当連結会計年度
(1)	貸倒引当金	59,202	62,037
(2)	利息返還損失引当金	4,680	3,592
(3)	繰延税金資産	5,164	7,292

2. 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

(1) 貸倒引当金

当社グループでは、すべての債権を、「自己査定実施規程」に基づき、与信戦略部が資産査定を実施し、その査定結果に基づいて、予め定めている債権・引当基準に則り、貸倒引当金を計上しております。

破綻先債権（元本または利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本または利息の取立てまたは弁済の見込がないものとして未収利息を計上しなかった債権（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上債権」という）等のうち破産債権、再生債権その他これらに準ずる債権）、および延滞債権（破綻先以外の未収利息不計上債権のほか、今後、破綻先となる可能性が大きいと認められる債権）のうち実質破綻先（破綻先と同等の状況にある債務者）に対する債権については、債権額から回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として直接減額しております。

一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については債権の内容を検討し、必要額を計上しております。

貸倒引当金は、自己査定実施規程に基づく債務者区分かつ商品区分ごとに貸倒実績率を算定した上で、それらの区分の債権残高に各々の貸倒実績率を乗じて算出しており、債権残高は、延滞月数及び債務者の個別状況に応じた区分（弁護士介入、破産など）に従って、自己査定実施規程に定められた債務者区分、商品区分毎に分類、集計を行っております。

貸倒実績率は、債権の平均残存期間などを基礎として決定した商品区分ごとの算定期間（1～12年）における当初債権発生総額と毀損累計額から算定し、3算定期間の平均値を貸倒実績率としております。

また、破綻先および実質破綻先に対する担保付債権等については、原則として債権額から担保の評価額による回収が可能と認められる額を控除した残額に対し、必要額を計上しております。

当社グループは、現状の貸倒引当金計上額で、当社グループが認識する信用リスクから発生しうる損失を十分にカバーしていると考えておりますが、将来見込み等必要な修正を加えているものの貸倒引当金の見積りは基本的に過去の貸倒実績により計算しているため、急激な経済環境の変化や担保価値の下落によって、実際の貸倒損失が予測したそれと大きく異なり、引当額を大幅に上回り、翌連結会計年度の連結財務諸表において貸倒引当金が不十分となる可能性があります。

(2) 利息返還損失引当金

利息返還損失引当金は、利息制限法の上限金利を超え、いわゆる出資法の上限金利以下の貸付利率（いわゆるグレーゾーン金利）により営業を行っていた貸金業者が、債務者から利息制限法の上限金利を超過して受け取った利息の返還請求に起因して生じる返還額（損失）に備えて設定する引当金であります。

利息の返還請求は貸付に関する契約書に債務者が超過利息を含む約定利息の支払を遅滞した時には期限の利益を喪失する旨の特約が含まれる場合、特段の事情がない限り、当該超過利息は任意に支払われたとは認められないとする2006年の最高裁判所の判断に基づくもので、一般的に、債務者からの返還請求があれば、利息制限法に定められた上限利率により計算した金額を超えるときはその超過部分（過払利息）について貸金業者は返還することとなります。

当社グループでは、2007年度より新規顧客および既存顧客の一部について既に引き下げ後の上限金利を適用して新たな貸付を行い、2010年6月の改正貸金業法の完全施行により、新規貸付はすべて利息制限法の範囲内で実施しておりますが、過去にグレーゾーン金利で営業を行っており、債務者等から返還請求があるため利息返還損失引当金の計上が必要になります。

利息返還損失引当金の計算に当たっては、グレーゾーン金利により貸し付けられた貸付金を対象として、過去の返還請求の推移から将来の一定期間における過払利息の返還請求件数を予想し、それに1顧客当たりの返還請求見込金額および返還請求額に対する見込返還金額の比率（返還率）を乗じることにより、将来返還が見込まれる額を見積もっております。

前連結会計年度までの見積りにおいては、過去の返還請求件数が年々どの程度の割合で減少してきたかを分析し、その減少傾向が今後も続くと仮定して、将来の返還請求件数を算定しております。

しかしながら、返還請求件数の予測と実績の乖離が拡大してきたことから、当連結会計年度より、過去の実績データに基づき、返還請求の対象となりうる契約の状態区分（取引継続、完済、脱会等）の推移と返還請求の発生状況との関係を分析し、将来の返還請求件数を算定する方法に変更しております。

これらの見積りの変更の結果、利息返還損失引当金は従来の方法による計算結果と比較して2,072百万円増加しており、経常利益および税金等調整前当期純利益はそれぞれ2,072百万円減少しております。

また、当社子会社である株式会社アプラスインベストメントと、当社グループ外の新生フィナンシャル株式会社との間で締結されていた過払金返還債務に関する補償契約に基づく補償義務の履行に伴って引き受けた過払金返還債務の対価として現金1,144百万円を受領しており、当該債務について同額を利息返還損失引当金として計上しております。なお、当該補償契約は以上をもって終了しております。

近時では「グレーゾーン金利」に関する取引履歴開示請求の件数や利息返還請求額は過去のピークを大きく下回って安定的に推移しており、将来の予想を加味した見積りにより利息返還に係る追加的な損失の発生は限定的になるものと認識しております。他方、引当金額は基本的に過去の経験に基づく要素をもとに計算されており、現時点では予想できない将来の環境変化等によって、現在の引当金額が将来の利息返還請求および関連する貸倒損失への対応として不十分である場合、翌連結会計年度の連結財務諸表において追加の費用が生じる可能性があります。

(3) 繰延税金資産

当社グループは、親会社である株式会社SBI新生銀行を通算親会社とするグループ通算制度を適用しております。

2025年7月31日付で、株式会社SBI新生銀行の親会社であるSBIホールディングス株式会社による完全支配関係が生じましたが、2025年12月17日付で、当該完全支配関係は解消されております。

これに伴い、2025年7月30日をもって、株式会社SBI新生銀行を通算親会社とするグループ通算制度の適用を取りやめ、以降は単体納税制度を適用しております。

また、当社では、前連結会計年度まで翌1年間の課税所得に関する見直しをはじめとする様々な予測・前提に基づき、将来の税金負担額を軽減する効果を有していると判断した将来減算一時差異について、繰延税金資産を計上してはいましたが、当社の中期経営計画、過去における中期経営計画の達成状況、過去および当期の課税所得の推移等を勘案して、当連結会計年度より翌3年間の課税所得等に関する見直しに基づき、繰延税金資産を計上しております。

上記変更により、繰延税金資産が4,458百万円増加しております。

繰延税金資産の計上に関する判断は、毎決算期末時点において実施しておりますが、翌3年間の一時差異等加減算前課税所得の見積り変更等により、前連結会計年度に計上した繰延税金資産の一部、または全額の回収ができないと判断した場合には、繰延税金資産を取り崩しております。翌3年間の一時差異等加減算前課税所得は十分見込めるとしても、期末時点において、将来の一定の事実の発生が見込めないことまたは当社グループによる将来の一定の行為の実施についての意思決定または実施計画等が存在しないことにより、将来の税金負担額の軽減の要件を充足することが見込めない場合には、同様に当社グループの繰延税金資産を取り崩しております。

(未適用の会計基準等)

- ・「リースに関する会計基準」(企業会計基準第34号 2024年9月13日 企業会計基準委員会)
 - ・「リースに関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第33号 2024年9月13日 企業会計基準委員会)
- 等

1. 概要

企業会計基準委員会において、日本基準を国際的に整合性のあるものとする取組みの一環として、借手の全てのリースについて資産及び負債を認識するリースに関する会計基準の開発に向けて、国際的な会計基準を踏まえた検討が行われ、基本的な方針として、IFRS第16号の単一の会計処理モデルを基礎とするものの、IFRS第16号の全ての定めを採り入れるのではなく、主要な定めのみを採り入れることにより、簡素で利便性が高く、かつ、IFRS第16号の定めを個別財務諸表に用いても、基本的に修正が不要となることを目指したリース会計基準等が公表されました。

借手の会計処理として、借手のリースの費用配分の方法については、IFRS第16号と同様に、リースがファイナンス・リースであるかオペレーティング・リースであるかにかかわらず、全てのリースについて使用権資産に係る減価償却費及びリース負債に係る利息相当額を計上する単一の会計処理モデルが適用されます。

2. 適用予定日

2028年3月期の期首から適用します。

3. 当該会計基準等の適用による影響

「リースに関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

- ・「後発事象に関する会計基準」(企業会計基準第41号 2026年1月9日 企業会計基準委員会)
- ・「後発事象に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第35号 2026年1月9日 企業会計基準委員会)

1. 概要

「後発事象に関する会計基準」等は、後発事象の定義、会計処理及び開示等を取り扱う包括的な会計基準を設定することを優先的な課題とし、日本公認会計士協会 監査・保証基準委員会 監査基準報告書560実務指針第1号「後発事象に関する監査上の取扱い」で示されている会計に関する内容を原則として踏襲して企業会計基準委員会に移管することを基本的な方針として、表現の見直し及び後発事象の評価期間の整理を行うとともに、財務諸表の公表の承認に関する注記を新たに求める等、後発事象に関する会計処理及び開示について定めたものであります。

2. 適用予定日

2028年3月期の期首から適用します。

(表示方法の変更)

当社グループでは連結損益及び包括利益計算書における営業収益について、当連結会計年度より、事業活動による収益を「事業収益」と集約して表示した上で、「連結損益及び包括利益計算書関係」注記において事業収益の内訳を当社グループにおける報告セグメントで開示する方法に変更するとともに、その他関連する注記の記載内容を変更しております。

この変更は、当社グループ内での再編の進展により、事業の重複整理や分業化・専門化が進み、報告セグメントの構成や役割が明確化されたことを契機としております。外部環境の変化も踏まえ、報告セグメントと整合した形で開示することが、財務諸表利用者にとって事業の実態をより理解しやすくなると判断したためです。

なお、集約表示とする一方で、注記において従来と同等の開示レベルを担保することで、透明性と詳細性の両立を図っております。

当該表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。この結果、前連結会計年度の連結損益及び包括利益計算書において、「営業収益」の「包括信用購入あっせん収益」に表示していた20,334百万円、「個別信用購入あっせん収益」に表示していた24,861百万円、「信用保証収益」に表示していた16,846百万円、「融資収益」に表示していた7,139百万円、「金融収益」に表示していた1,044百万円、「その他の営業収益」に表示していた24,813百万円は、「事業収益」と「その他の営業収益」として組替えており、また、「連結損益及び包括利益計算書」注記において、「事業収益」の内訳を「ショッピングクレジット」45,199百万円、「カード」22,980百万円、「ローン」4,463百万円、「ペイメント」19,330百万円および「その他」2,963百万円として表記するとともに、「その他の営業収益」は103百万円となり、その他関連する注記の前連結会計年度の数値についても組替えを行っております。

(連結貸借対照表関係)

1. 事業別営業性資産残高

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
ショッピングクレジット	1,642,657百万円	1,681,270百万円
カード	107,382	113,811
ローン	124,930	118,380
その他	59,120	27,585
計	1,934,092	1,941,048

(注) 事業別営業性資産残高は、割賦売掛金、信用保証割賦売掛金およびリース投資資産によって構成されております。

2. 割賦売掛金を流動化により譲渡した残高

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
ショッピングクレジット	- 百万円	90,482百万円
ローン	25,682	17,511
計	25,682	107,994

3. 担保資産及び担保付債務

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
担保に供している資産		
割賦売掛金等	80,593百万円	156,071百万円
担保付債務		
長期債権流動化債務	80,593	156,071

4. 金銭の信託は、主として信用保証業務の一環として設定しているものであります。

5. 減価償却累計額

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
有形固定資産	5,601百万円	4,855百万円

6. ソフトウェアには、ソフトウェア仮勘定が含まれております。

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
ソフトウェア仮勘定	3,174百万円	3,959百万円

7. 関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
投資有価証券	100百万円	110百万円

8. 事業別割賦利益繰延

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
ショッピングクレジット		
期首残高	39,929百万円	46,307百万円
増加額	48,014	53,424
減少額	41,635	51,593
期末残高	46,307 (6,319)	48,139 (5,946)
カード		
期首残高	484百万円	509百万円
増加額	20,070	21,357
減少額	20,045	21,247
期末残高	509	618
その他		
期首残高	29百万円	61百万円
増加額	391	274
減少額	359	310
期末残高	61 (0)	25 (0)
計		
期首残高	40,444百万円	46,878百万円
増加額	68,475	75,057
減少額	62,041	73,152
期末残高	46,878 (6,319)	48,783 (5,946)

(注) ()内の金額は、加盟店手数料であり、内数であります。

9. 偶発債務

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
保証債務残高のうち債権、債務とみな されない残高	29,462百万円	31,170百万円

(注) 保証債務残高のうち債権、債務とみなされない残高には、最大貸料保証債務(家賃の1ヶ月相当額)を算定し、前連結会計年度27,576百万円、当連結会計年度29,428百万円を含めて記載しております。

10. ローンカードおよびクレジットカードに附帯するカードキャッシングにおける貸出未実行残高

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
貸出未実行残高	532,399百万円	499,632百万円

(注) 貸出未実行残高は、顧客の信用状態等により当社グループが任意に利用を停止できるものであり、貸出未実行残高そのものが必ずしも当社グループの将来のキャッシュ・フローに重要な影響を与えるものではありません。

11. 土地の再評価

「土地の再評価に関する法律」(1998年3月31日公布法律第34号)および「土地の再評価に関する法律の一部を改正する法律」(1999年3月31日公布法律第24号)に基づき事業用土地の再評価を行い、評価差額に係る税金相当額を控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

・再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(1998年3月31日公布政令第119号)第2条第4号の定めに従い、土地の評価額を合理的に算出しております。

・再評価を行った年月日 2002年3月1日

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
再評価を行った土地の期末における時 価と再評価後帳簿価額との差額	54百万円	51百万円

(連結損益及び包括利益計算書関係)

1. 事業収益

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
ショッピングクレジット	45,199百万円	55,990百万円
カード	22,980	24,043
ローン	4,463	4,444
ペイメント	19,330	19,240
その他	2,963	2,761
計	94,936	106,479

2. 割賦売掛金を流動化により譲渡したことによる損益

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
ショッピングクレジット	- 百万円	7,240百万円
ローン	327	459
計	327	7,699

3. 販売費及び一般管理費の主な内容

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
貸倒引当金繰入額	17,797百万円	17,729百万円
ポイント引当金繰入額	3,595	2,977
賞与引当金繰入額	2,480	2,850
利息返還損失引当金繰入額	-	1,940
支払手数料	29,703	30,164
従業員給料手当	8,043	8,293

4. その他の包括利益に係る組替調整額並びに法人税等及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	0百万円	2百万円
組替調整額	-	-
法人税等及び税効果調整前	0	2
法人税等及び税効果額	0	0
その他有価証券評価差額金	0	1
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	2,679	2,311
組替調整額	478	769
法人税等及び税効果調整前	2,200	1,541
法人税等及び税効果額	877	546
退職給付に係る調整額	1,323	995
その他の包括利益合計	1,323	996

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末株 式数(株)
発行済株式				
普通株式	1	-	-	1
合計	1	-	-	1
自己株式				
普通株式	-	-	-	-
合計	-	-	-	-

2. 配当に関する事項

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末株 式数(株)
発行済株式				
普通株式	1	-	-	1
合計	1	-	-	1
自己株式				
普通株式	-	-	-	-
合計	-	-	-	-

2. 配当に関する事項

該当事項はありません。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に記載されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
現金及び預金勘定	88,004百万円	98,917百万円
流動資産のその他に含まれる現金同等物	13,888	14,745
現金及び現金同等物の期末残高	101,893	113,663

2. 子会社化および合併により引き継いだ資産および負債の主な内容

前連結会計年度(自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

前連結会計年度に子会社化したアルファ債権回収株式会社より引き継いだ資産および負債の主な内容は次のとおりであります。

(単位:百万円)

	アルファ債権回収株式会社
流動資産	2,708
固定資産	229
資産合計	2,937
流動負債	702
固定負債	48
負債合計	751

当連結会計年度(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

該当事項はありません。

(リース取引関係)

ファイナンス・リース取引

1. 借手側

該当事項はありません。

2. 貸手側

リース投資資産は、転リース取引に係るものであり、利息相当額控除後の金額を計上しております。

オペレーティング・リース取引

1. 借手側

未経過リース料

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
1年内	0	1
1年超	-	5
合計	0	6

2. 貸手側

該当事項はありません。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、ショッピングクレジット事業、カード事業、ローン事業などの消費者向けファイナンス事業を展開しております。これらの事業運営にあたっては、金融市場の動向や、調達と運用のバランス管理（ALM）の観点から、銀行借入による間接金融に加え、短期社債の発行や債権流動化などの直接金融を活用し、資金調達手段の多様化を図っております。

当社グループが保有する金融資産は固定金利債権が大半を占めている一方、足元では変動金利債権の比率を高めております。また、金融負債については変動金利債務が主体であるものの、固定金利債務の比率を高めることで、金利上昇局面を見据えたALMに基づくポートフォリオ管理を実施しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当社グループが保有する金融資産は、主に個人に対するショッピングクレジット事業、カード事業およびローン事業による金銭債権で構成されており、顧客の契約不履行や加盟店の倒産等によってもたらされる信用リスクにさらされております。消費者金融事業の一部については、利息返還請求を受ける可能性があります。

金融負債においては、借入金、短期社債および債権流動化などの資金調達が、金融市場の環境変化などにより利用できなくなる流動性リスクにさらされております。また、変動金利の借入を行っているため、金利の変動リスクにさらされております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスクの管理

当社グループは、クレジットポリシーおよび信用リスク管理にかかる諸規程を整備し、これらに基づいて、個別契約に対する初期与信審査、途上与信審査、信用情報管理、内部格付、延滞債権・問題債権への対応や、加盟店に対する初期・途上管理への対応などの総合的な与信管理に関する体制を構築し、運営しております。これらの与信管理は、信用リスク管理本部が担当しており、その内容について経営会議等への定期的な報告や付議を行っております。

市場リスクの管理

ア．金利変動リスクの管理

当社グループは、ALMによって金利の変動リスクを管理しております。経営会議の下部組織としてALM委員会を設置し、ALM委員会規程に基づき、ALMに関する基本方針の策定、調達・運用の金利水準の分析、調達方法の審議、社内適用金利（基準金利）の審議などを行っております。具体的には、財務管理部において金利感応度分析やギャップ分析等により資産・負債のバランスをモニタリングし、その結果について、ALM委員会に報告しております。

イ．市場リスクに係る定量的情報

当社グループでは、金融資産および金融負債について、金利の合理的な変動幅を用いた時価に与える影響額を、金利の変動リスクの管理に当たっての定量的分析に利用しております。金利以外のすべてのリスク変数が一定であることを仮定し、2026年3月31日現在、指標となる金利が10ペーシス・ポイント（0.1%）上昇したものと想定した場合には、資産の時価が3,838百万円、負債の時価が974百万円減少し、10ペーシス・ポイント（0.1%）下落したものと想定した場合には、資産の時価が3,867百万円、負債の時価が978百万円増加するものと把握しております。

資金調達に係る流動性リスクの管理

当社グループは、財務管理部において日次の資金管理を行うほか、ALM委員会において調達構造の状況や金融機関との取引状況、資金繰りの状況について検証を行うことにより、流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算出された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価およびこれらの差額については、次のとおりであります。なお、市場価格のない株式等は、次表には含めておりません（注）2に記載のとおりであります。）。

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：同一の資産又は負債の活発な市場における（無調整の）相場価格により算定した時価

レベル2の時価：レベル1のインプット以外の直接または間接的に観察可能なインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：重要な観察できないインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価をもって貸借対照表価額とする金融資産及び金融負債

前連結会計年度（2025年3月31日）

（単位：百万円）

区分	連結貸借対照表計上額			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券				
その他有価証券				
株式	8	-	-	8
資産合計	8	-	-	8

当連結会計年度（2026年3月31日）

（単位：百万円）

区分	連結貸借対照表計上額			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券				
その他有価証券				
株式	10	-	-	10
資産合計	10	-	-	10

(2) 時価をもって連結貸借対照表価額としない金融資産および金融負債

現金及び預金、買掛金、短期借入金、短期社債、預り金は、短期間（１年以内）のものが大半を占めており、時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しております。

前連結会計年度（2025年３月31日）

（単位：百万円）

区分	時価				連結貸借 対照表 計上額	差額
	レベル1	レベル2	レベル3	合計		
割賦売掛金	-	-			1,186,400	
貸倒引当金(*1)	-	-			15,949	
割賦利益繰延(*2)	-	-			26,963	
	-	-	1,141,907	1,141,907	1,143,487	1,580
金銭の信託	-	-	72,246	72,246	71,673	572
資産合計	-	-	1,214,153	1,214,153	1,215,161	1,008
1年内返済予定の長期借入金および長期借入金	-	-	263,926	263,926	268,490	4,563
長期債権流動化債務	-	-	80,434	80,434	80,593	159
負債合計	-	-	344,360	344,360	349,083	4,723

(* 1) 割賦売掛金に対応する貸倒引当金のうち、要管理先以下の個別貸倒引当金を控除しております。

(* 2) 割賦売掛金に対応する割賦利益繰延のうち、利用者手数料を控除しております。

(* 3) 上記の他、信用保証割賦売掛金を含む債務保証があり、時価（レベル3）は 13,372百万円であります。

当連結会計年度（2026年３月31日）

（単位：百万円）

区分	時価				連結貸借 対照表 計上額	差額
	レベル1	レベル2	レベル3	合計		
割賦売掛金	-	-			1,167,212	
貸倒引当金(*1)	-	-			16,793	
割賦利益繰延(*2)	-	-			27,473	
	-	-	1,119,455	1,119,455	1,122,946	3,490
金銭の信託	-	-	66,839	66,839	67,467	627
資産合計	-	-	1,186,295	1,186,295	1,190,414	4,118
1年内返済予定の長期借入金および長期借入金	-	-	433,912	433,912	442,960	9,048
長期債権流動化債務	-	-	155,702	155,702	156,071	369
負債合計	-	-	589,615	589,615	599,032	9,417

(* 1) 割賦売掛金に対応する貸倒引当金のうち、要管理先以下の個別貸倒引当金を控除しております。

(* 2) 割賦売掛金に対応する割賦利益繰延のうち、利用者手数料を控除しております。

(* 3) 上記の他、信用保証割賦売掛金を含む債務保証があり、時価（レベル3）は 11,215百万円であります。

(注) 1. 金融商品の時価の算定ならびに有価証券に関する事項

資産

投資有価証券

投資有価証券(株式)については、活発な市場における無調整の相場価格を利用しており、レベル1の時価に分類しております。

割賦売掛金

商品種類に基づく単位毎に、主として期限前返済による影響を反映した見積りキャッシュ・フローを、同様の新規契約を行った場合に想定される利率にその他市場参加者が要求するリスク・プレミアムを考慮し調整した割引率により割り引いて時価を算定しており、重要な観察できないインプットを用いていることからレベル3の時価に分類しております。また、貸倒引当金については、将来キャッシュ・フローが、全債務者区分を対象に通常の約定弁済にもとづくものとなっていることから、要管理先以下の個別貸倒引当金を現在価値合計から別途控除しております。なお、時価の算定において、利息返還損失引当金については考慮しておりません。

金銭の信託

金銭の信託については、主として信用保証業務の一環として設定しているものであり、信託財産の構成物である資産の内容に応じて、割引現在価値等によって算定した価格の時価としており、重要な観察出来ないインプットを用いていることからレベル3の時価に分類しております。

負債

1年内返済予定の長期借入金および長期借入金

元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて時価としており、重要な観察出来ないインプットを用いていることからレベル3の時価に分類しております。

長期債権流動化債務

元利金の合計額を同様の流動化を行った場合に想定される利率で割り引いて時価としており、重要な観察出来ないインプットを用いていることからレベル3の時価に分類しております。

その他

債務保証契約

契約上の保証料の将来キャッシュ・フローと同様の新規契約を実行した場合に想定される保証料にその他市場参加者が要求するリスク・プレミアムを考慮し調整した将来キャッシュ・フローとの差額を割り引いて算定した現在価値の時価としており、レベル3の時価に分類しております。

(注) 2. 市場価格のない株式等

(単位:百万円)

区分	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
市場価格のない株式等()	260	270
合計	260	270

()市場価格のない株式等には非上場株式等が含まれ、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号2020年3月31日)第5項に従い、時価開示の対象とはしておりません。

(注)3. 金銭債権および満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度(2025年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
現金及び預金	88,004	-	-	-	-	-
割賦売掛金	223,879	148,314	124,278	99,804	86,989	457,754
合計	311,883	148,314	124,278	99,804	86,989	457,754

当連結会計年度(2026年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
現金及び預金	98,917	-	-	-	-	-
割賦売掛金	202,634	127,910	111,121	94,570	84,226	474,177
合計	301,552	127,910	111,121	94,570	84,226	474,177

(注)4. 社債、長期借入金およびその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(2025年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期社債	16,000	-	-	-	-	-
短期借入金	695,100	-	-	-	-	-
長期借入金	49,951	32,791	74,410	10,768	60,521	40,046
合計	761,051	32,791	74,410	10,768	60,521	40,046

長期債権流動化債務は、返済予定額を正確に算定することが困難なため記載しておりません。

当連結会計年度(2026年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期社債	35,000	-	-	-	-	-
短期借入金	392,310	-	-	-	-	-
長期借入金	75,961	104,586	114,148	62,284	55,721	30,258
合計	503,271	104,586	114,148	62,284	55,721	30,258

長期債権流動化債務は、返済予定額を正確に算定することが困難なため記載しておりません。

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2025年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額(百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	8	7	0

(注)非上場株式(連結貸借対照表計上額160百万円)については、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度(2026年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額(百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	10	7	3

(注)非上場株式(連結貸借対照表計上額160百万円)については、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社グループは、確定給付型の制度として企業年金基金制度および退職一時金制度を設けております。
なお、退職給付信託を設定しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
退職給付債務の期首残高	15,225百万円	12,666百万円
勤務費用	667	553
利息費用	152	297
数理計算上の差異の発生額	2,662	1,182
退職給付の支払額	714	638
退職給付債務の期末残高	12,666	11,696

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
年金資産の期首残高	24,853百万円	25,321百万円
期待運用収益	667	849
数理計算上の差異の発生額	16	1,128
事業主からの拠出額	377	390
退職給付の支払額	593	537
年金資産の期末残高	25,321	27,152

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る資産及び
退職給付に係る負債の調整表

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	12,666百万円	11,696百万円
年金資産	25,321	27,152
非積立型の退職給付債務	-	-
連結貸借対照表に計上された資産と負債の純額	12,654	15,456
退職給付に係る資産	12,654	15,456
退職給付に係る負債	-	-
連結貸借対照表に計上された資産と負債の純額	12,654	15,456

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
勤務費用	667百万円	553百万円
利息費用	152	297
期待運用収益	667	849
数理計算上の差異の費用処理額	478	769
その他	0	1
確定給付制度に係る退職給付費用	325	770
合計	325	770

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（法人税等及び税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
数理計算上の差異	2,200百万円	1,541百万円
合計	2,200	1,541

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（法人税等及び税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
未認識数理計算上の差異	6,719百万円	8,261百万円
合計	6,719	8,261

(7) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
株式	19%	25%
債券	33	43
生保一般勘定	13	12
その他	35	20
合計	100	100

（注）年金資産合計には、退職給付信託が当連結会計年度25%含まれております。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在および予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在および将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
割引率	1.9～2.4%	1.9～3.4%
長期期待運用収益率	3.5%	2.0～3.5%
予想昇給率	0.0～24.0%	0.0～24.0%

（ストック・オプション等関係）

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金および貸倒損失	39,908百万円	39,787百万円
税務上の繰越欠損金 (注)	6,585	4,212
利息返還損失引当金	1,653	1,272
ポイント引当金	975	1,072
賞与引当金	866	1,008
その他	1,904	2,511
繰延税金資産小計	51,894	49,865
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額 (注)	2,790	1,672
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	40,637	36,570
評価性引当額小計	43,427	38,243
繰延税金資産合計	8,466	11,622
繰延税金負債		
退職給付費用	3,093百万円	4,042百万円
資産除去費用	185	262
連結子会社資産時価評価差額金	23	23
その他	0	1
繰延税金負債合計	3,302	4,329
繰延税金資産の純額	5,164	7,292

(注) 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

前連結会計年度(2025年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の繰越欠損金 ()	226	4,247	-	993	625	492	6,585
評価性引当額	226	823	-	829	545	365	2,790
繰延税金資産	-	3,423	-	164	80	126	3,795

() 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

当連結会計年度(2026年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の繰越欠損金 ()	2,130	-	828	537	83	633	4,212
評価性引当額	44	-	374	537	83	633	1,672
繰延税金資産	2,085	-	454	-	-	-	2,539

() 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2025年3月31日)	当連結会計年度 (2026年3月31日)
法定実効税率	34.5%	34.6%
(調整)		
評価性引当額	37.7	23.3
住民税均等割	1.0	0.4
交際費	2.0	0.4
その他	0.0	1.8
税効果会計適用後の法人税等の負担率	0.2	10.3

3. 法人税及び地方法人税の会計処理またはこれらに関する税効果会計の処理

当社グループは、親会社である株式会社SBI新生銀行を通算親会社とするグループ通算制度を適用しておりました。

2025年7月31日付で、株式会社SBI新生銀行の親会社であるSBIホールディングス株式会社による完全支配関係が生じましたが、2025年12月17日付で、当該完全支配関係は解消されております。

これに伴い、2025年7月30日をもって、株式会社SBI新生銀行を通算親会社とするグループ通算制度の適用を取りやめ、以降は単体納税制度を適用しております。

(企業結合等関係)

共通支配下の取引等

当社と株式会社クリアパスとの合併

当社は子会社である株式会社クリアパスとの間で、2025年1月30日に締結した吸収合併契約に基づき、株式会社クリアパスを2025年4月1日付で吸収合併いたしました。

1. 取引の概要

(1) 結合当事企業の名称および事業の内容(2025年3月31日時点)

結合企業(合併存続会社)

名称 株式会社アプラス

事業の内容 ショッピングクレジット事業、カード事業およびペイメント事業等

被結合企業(合併消滅会社)

名称 株式会社クリアパス

事業の内容 ローン事業

総資産 36,839百万円

総負債 32,896百万円

純資産 3,942百万円

(2) 企業結合日

2025年4月1日

(3) 企業結合の法的形式

株式会社アプラスを存続会社、株式会社クリアパスを消滅会社とする吸収合併

(4) 結合後企業の名称

株式会社アプラス(当社)

(5) その他取引の概要に関する事項

アプラスグループ内で重複する事業を整理し、業務運営の効率化を図ることを目的としております。

2. 実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」(企業会計基準第21号 2019年1月16日)及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第10号 2019年1月16日)に基づき、共通支配下の取引として処理を行っております。

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、「注記事項(セグメント情報等)」に記載のとおりであります。

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、「注記事項(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)4. 会計方針に関する事項(5)重要な収益及び費用の計上基準 顧客との契約から生じる収益の計上基準」に記載のとおりであります。

3. 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係ならびに当連結会計年度末において存在する顧客との契約から翌連結会計年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

(1) 顧客との契約から生じた債権および契約負債の残高

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
顧客との契約から生じた債権(期首残高)	1,013	917
顧客との契約から生じた債権(期末残高)	917	706
契約負債(期首残高)	503	570
契約負債(期末残高)	570	663

連結貸借対照表上、顧客との契約から生じた債権は流動資産の「その他」に、契約負債は流動負債の「その他」に計上しております。契約負債は主として、当社が顧客より受領したカード年会費のうち、期末時点において履行義務を充足していない残高であり、履行義務の充足に伴い1年以内で収益を認識することを見込んでおります。

なお、当連結会計年度に認識された収益のうち、期首現在の契約負債の残高に含まれていた金額ならびに過去の期間に充足した履行義務から認識した収益の額に重要性はありません。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当社においては、残存履行義務に配分した取引価格について当初に予想される契約期間が1年を超える重要な契約がないため、記載を省略しております。

また、顧客との契約から生じる対価の中に、取引価格に含まれていない変動対価の額等の重要な金額はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、分離された財務情報が入手可能な構成単位であり、最高経営責任者が、経営資源の配分の決定および業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、お客さまに提供する金融商品・サービス別のセグメントから構成されており、「ショッピングクレジット事業」、「カード事業」、「ローン事業」および「ペイメント事業」に区分し、これら4つを報告セグメントとしております。

各セグメントの主な内容は以下のとおりであります。

「ショッピングクレジット事業」は、個別信用購入あっせん業務および信用保証業務、「カード事業」は、包括信用購入あっせん業務およびクレジットカードを手段とした融資業務、「ローン事業」は、融資業務、「ペイメント事業」は、集金代行業務であります。

また、当社グループでは、株式会社クリアパスとの合併を含むグループ内での再編の進展により、事業の重複整理や分業化・専門化が進み、各子会社の役割を明確化し、金銭債権の取得・回収等の事業に特化することとなりました。これを契機として、従来報告セグメントとして開示していた「子会社」について、重要性が低下したことから、当連結会計年度より「その他」に含めることといたしました。

なお、前連結会計年度のセグメント情報についても、変更後の区分に基づき作成・記載しております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。

セグメント間の内部取引における取引価格は、第三者取引価格に基づいております。

なお、資産、負債については、事業セグメントごとの管理を行っておりません。

また、報告セグメントの算定上、減価償却費および支払利息は、一部について他の営業経費と合算した上で事業セグメントに配分しており、減価償却費、支払利息としては事業セグメントごとの把握・管理は行っておりません。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報及び収益の分解情報

前連結会計年度（自 2024年4月1日 至 2025年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント					その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結損益 及び包括 利益計算 書計上額 (注) 3
	ショッ ピング クレ ジット	カード	ローン	ペイメン ト	計				
営業収益									
顧客との契 約から生じ る収益 (注) 4	685	13,878	756	19,325	34,644	1,272	35,916	-	35,916
その他の収 益(注) 5	44,514	9,102	3,708	5	57,329	1,794	59,123	-	59,123
外部顧客へ の売上高	45,199	22,980	4,464	19,330	91,973	3,066	95,039	-	95,039
セグメント間 の内部売上高 又は振替高	-	-	0	9	9	157	166	166	-
計	45,199	22,980	4,464	19,339	91,982	3,223	95,205	166	95,039
セグメント 利益又は損 失()	5,586	815	2,020	2,607	9,398	1,774	7,624	352	7,976

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、住宅ローン事業を含んでおりません。

- セグメント利益又は損失の調整額352百万円には、セグメント間取引消去25百万円、各報告セグメントに配分していない調整額327百万円が含まれております。
- セグメント利益又は損失は、連結損益及び包括利益計算書の営業利益と調整を行っております。
- 顧客との契約から生じる収益は主として、カード事業の代行手数料収入およびカード年会費収入、ペイメント事業の集金代行収入であります。
- 主として、「金融商品に関する会計基準」（企業会計基準第10号 2019年7月4日）の適用範囲に含まれる金融商品に係る取引および「リース取引に関する会計基準」（企業会計基準第13号 2007年3月30日）の適用範囲に含まれるリース取引等における収益が含まれております。

当連結会計年度（自 2025年4月1日 至 2026年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント					その他 (注)1	合計	調整額 (注)2	連結損益 及び包括 利益計算 書計上額 (注)3
	ショッピング クレジット	カード	ローン	ペイメン ト	計				
営業収益									
顧客との契約から生じる収益 (注)4	649	14,424	303	19,234	34,612	1,336	35,948	-	35,948
その他の収益 (注)5	55,341	9,618	4,140	5	69,105	1,580	70,686	-	70,686
外部顧客への売上高	55,990	24,043	4,444	19,240	103,718	2,917	106,635	-	106,635
セグメント間の内部売上高 又は振替高	-	-	0	6	6	876	882	882	-
計	55,990	24,043	4,444	19,246	103,724	3,793	107,517	882	106,635
セグメント利益又は損失 ()	12,190	275	1,543	2,481	16,489	1,344	15,145	2,621	17,766

- (注)1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、住宅ローン事業を含んでおりません。
- セグメント利益又は損失の調整額2,621百万円には、セグメント間取引消去15百万円、利息返還損失引当金戻入益1,940百万円、各報告セグメントに配分していない調整額666百万円が含まれております。
 - セグメント利益又は損失は、連結損益及び包括利益計算書の営業利益と調整を行っております。
 - 顧客との契約から生じる収益は主として、カード事業の代行手数料収入およびカード年会費収入、ペイメント事業の集金代行収入であります。
 - 主として、「金融商品に関する会計基準」（企業会計基準第10号 2019年7月4日）の適用範囲に含まれる金融商品に係る取引および「リース取引に関する会計基準」（企業会計基準第13号 2007年3月30日）の適用範囲に含まれるリース取引等における収益が含まれております。

【関連情報】

1. 製品及びサービスごとの情報

当社および連結子会社が営む業務は信用供与から回収までの事業の種類や性質等が類似しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 営業収益

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の営業収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2024年4月1日 至 2025年3月31日）

（単位：百万円）

	ショッピングクレジット	カード	ローン	ペイメント	その他	合計
当期償却額	-	-	-	-	440	440
当期末残高	-	-	-	-	43	43

当連結会計年度（自 2025年4月1日 至 2026年3月31日）

（単位：百万円）

	ショッピングクレジット	カード	ローン	ペイメント	その他	合計
当期償却額	-	-	-	-	43	43
当期末残高	-	-	-	-	-	-

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等

前連結会計年度（自 2024年4月1日 至 2025年3月31日）

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の 内容	議決権の被 所有割合 (%)	関係内容		取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
						役員の 兼任等 (人)	事業上の 関係				
親会社	(株)SBI新生 銀行	東京都 中央区	140,000	銀行業	100.0	-	預金の預入 資金の借入	資金の借入	11,065,000	短期借入金	660,000
								資金の返済	11,090,000		
								資金の借入 資金の返済	130,000	長期借入金	165,000
								利息の支払	4,712	未払費用	399

当連結会計年度（自 2025年4月1日 至 2026年3月31日）

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の 内容	議決権の被 所有割合 (%)	関係内容		取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
						役員の 兼任等 (人)	事業上の 関係				
親会社	(株)SBI新生 銀行	東京都 中央区	178,507	銀行業	100.0	-	預金の預入 資金の借入	資金の借入	9,294,500	短期借入金	380,000
								資金の返済	9,574,500		
								資金の借入 資金の返済	105,900	長期借入金	270,900
								利息の支払	7,555	未払費用	698

(注) 取引条件および取引条件の決定方針等

資金の借入 市場金利を勘案して交渉の上、決定しております。なお、担保は提供しておりません。

(イ) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等
前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の 内容	議決権の被 所有割合 (%)	関係内容		取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
						役員の 兼任等 (人)	事業上の 関係				
同一の親 会社を持 つ会社	(株)昭和リース	東京都 中央区	29,360	リース業	-	-	資産の賃貸 回収金保証	ベンダーリース	80,431	リース債務	84,859
								リース取引に 係る保証	33,789	信用保証 買掛金	35,488
								保証料収入	1,038		

当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の 内容	議決権の被 所有割合 (%)	関係内容		取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
						役員の 兼任等 (人)	事業上の 関係				
同一の親 会社を持 つ会社	(株)昭和リース	東京都 中央区	29,360	リース業	-	-	資産の賃貸 回収金保証	ベンダーリース	89,647	リース債務	91,819
								リース取引に 係る保証	35,928	信用保証 買掛金	35,789
								保証料収入	1,125		

(注) 取引条件および取引条件の決定方針等

- (1) リース債務はリース料の支払にかかるものであります。一般の取引条件と同様に決定しております。
- (2) 信用保証買掛金 当社が集金を行う債務保証であります。一般の取引条件と同様に決定しております。
- (3) ベンダーリースおよびリース取引に係る保証の取引金額は期中平均残高を記載しております。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等の場合に限る。)等

前連結会計年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の 内容	議決権の被 所有割合 (%)	関係内容		取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
						役員の 兼任等 (人)	事業上の 関係				
親会社	(株)SBI新生 銀行	東京都 中央区	140,000	銀行業	100.0	-	預金の預入 資金の借入	資金の借入	397,480	短期借入金	35,100
								資金の借入	394,980		
								利息の支払	160	未払費用	0

当連結会計年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の 内容	議決権の被 所有割合 (%)	関係内容		取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
						役員の 兼任等 (人)	事業上の 関係				
親会社	(株)SBI新生 銀行	東京都 中央区	178,507	銀行業	100.0	-	預金の預入 資金の借入	資金の借入	39,200	短期借入金	310
								資金の借入	44,490		
								利息の支払	29	未払費用	0

(注) 取引条件および取引条件の決定方針等

資金の借入 市場金利を勘案して交渉の上、決定しております。なお、担保は提供しておりません。

2. 親会社または重要な関連会社に関する注記

親会社情報

SBIホールディングス株式会社（東京証券取引所に上場）

株式会社SBI新生銀行（東京証券取引所に上場）

（1株当たり情報）

		前連結会計年度 （自 2024年4月1日 至 2025年3月31日）	当連結会計年度 （自 2025年4月1日 至 2026年3月31日）
1株当たり純資産額	百万円	73,550	90,535
1株当たり当期純利益	百万円	8,020	15,987

（注）1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載していません。

2. 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は次のとおりであります。

		前連結会計年度 （自 2024年4月1日 至 2025年3月31日）	当連結会計年度 （自 2025年4月1日 至 2026年3月31日）
親会社株主に帰属する当期純利益	百万円	8,020	15,987
普通株主に帰属しない金額	百万円	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	8,020	15,987
普通株式の期中平均株式数	株	1	1

【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率(%)	担保	償還期限
当社	短期社債	2025年1月22日～ 2026年3月30日	16,000 (16,000)	35,000 (35,000)	0.5～0.9	なし	2025年4月22日～ 2026年6月16日
合計	-	-	16,000 (16,000)	35,000 (35,000)	-	-	-

(注) 1. ()内の金額は、1年以内における償還予定額であります。

2. 連結決算日後5年以内における償還予定額は以下のとおりであります。

1年以内(百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
35,000	-	-	-	-

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	695,100	392,310	1.1	-
1年内返済予定の長期借入金	49,951	75,961	1.5	-
1年内返済予定のリース債務	18,888	20,940	2.6	-
長期借入金 (1年内返済予定のものを除く)	218,538	366,998	1.1	2027年～2033年
リース債務 (1年内返済予定のものを除く)	65,971	70,878	2.6	2027年～2034年
長期債権流動化債務	80,593	156,071	1.7	2026年～2041年
計	1,129,043	1,083,161	-	

(注) 1. 「平均利率」については、期末借入金残高等に対する加重平均利率を記載しております。

2. 長期借入金およびリース債務(1年内返済予定のものを除く)の連結決算日後5年以内における返済予定額は次のとおりであります。なお、長期債権流動化債務は、返済予定額を正確に算定することが困難なため記載しておりません。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	104,586	114,148	62,284	55,721
リース債務	19,727	17,577	14,321	10,058

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首および当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首および当連結会計年度末における負債および純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

該当事項はありません。

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	84,401	95,136
割賦売掛金	1,231,146,921	1,231,160,469
信用保証割賦売掛金	1,676,801	1,687,469
リース投資資産	184,859	191,819
前払費用	583	1,077
金銭の信託	465,188	467,467
その他	39,769	38,519
貸倒引当金	58,674	61,778
流動資産合計	2,039,850	2,080,180
固定資産		
有形固定資産		
建物	902	1,139
構築物	3	3
工具、器具及び備品	578	1,064
土地	161	161
建設仮勘定	-	150
有形固定資産合計	1,646	2,519
無形固定資産		
ソフトウェア	519,001	519,301
無形固定資産合計	19,001	19,301
投資その他の資産		
投資有価証券	168	170
関係会社株式	5,065	3,716
長期貸付金	0	0
長期前払費用	2,531	4,509
前払年金費用	5,994	7,194
繰延税金資産	7,404	10,212
その他	1,473	1,642
投資その他の資産合計	22,637	27,447
固定資産合計	43,286	49,268
資産合計	2,083,136	2,129,449

(単位：百万円)

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	19,211	16,920
信用保証買掛金	676,801	687,469
短期社債	16,000	35,000
短期借入金	7 660,000	7 392,000
1年内返済予定の長期借入金	48,506	75,961
リース債務	18,888	20,940
未払金	7,162	3,476
未払費用	910	1,304
未払法人税等	1,384	2,183
預り金	148,562	160,122
賞与引当金	2,457	2,810
ポイント引当金	2,754	3,027
前受収益	558	638
割賦利益繰延	6 46,817	6 48,758
その他	27	4
流動負債合計	1,650,042	1,450,618
固定負債		
長期借入金	7 216,616	7 366,998
長期債権流動化債務	3 80,593	3 156,071
リース債務	65,971	70,878
退職給付引当金	59	-
利息返還損失引当金	3,384	1,883
その他	1,090	1,526
固定負債合計	367,715	597,359
負債合計	2,017,757	2,047,977
純資産の部		
株主資本		
資本金	100	100
資本剰余金		
資本準備金	25	25
資本剰余金合計	25	25
利益剰余金		
その他利益剰余金	65,339	81,431
繰越利益剰余金	65,339	81,431
利益剰余金合計	65,339	81,431
株主資本合計	65,464	81,556
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	0	2
土地再評価差額金	86	86
評価・換算差額等合計	85	84
純資産合計	65,379	81,472
負債純資産合計	2,083,136	2,129,449

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当事業年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
営業収益		
事業収益	1, 2 92,865	1, 2 104,457
その他の営業収益	54	153
営業収益合計	92,920	104,611
営業費用		
販売費及び一般管理費	3 79,490	3 77,520
金融費用		
支払利息	5,725	11,135
その他	340	463
金融費用合計	6,066	11,599
営業費用合計	85,556	89,119
営業利益	7,363	15,491
営業外収益		
受取精算金	13	19
雑収入	55	59
営業外収益合計	68	79
営業外費用		
固定資産売却損	-	5
固定資産除却損	14	11
雑損失	31	9
営業外費用合計	46	26
経常利益	7,385	15,544
特別利益		
抱合せ株式消滅差益	-	4 2,594
特別利益合計	-	2,594
税引前当期純利益	7,385	18,139
法人税、住民税及び事業税	4,626	4,844
法人税等調整額	4,596	2,796
法人税等合計	30	2,047
当期純利益	7,355	16,091

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2024年4月1日 至 2025年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金		利益剰余金	株主資本合計
		資本準備金	資本剰余金 合計	その他 利益剰余金 繰越利益 剰余金	
当期首残高	100	25	25	57,984	58,109
当期変動額					
当期純利益				7,355	7,355
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	-	7,355	7,355
当期末残高	100	25	25	65,339	65,464

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	0	86	85	58,024
当期変動額				
当期純利益				7,355
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	0	-	0	0
当期変動額合計	0	-	0	7,354
当期末残高	0	86	85	65,379

当事業年度（自 2025年 4月 1日 至 2026年 3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金		利益剰余金	株主資本合計
		資本準備金	資本剰余金 合計	その他 利益剰余金 繰越利益 剰余金	
当期首残高	100	25	25	65,339	65,464
当期変動額					
当期純利益				16,091	16,091
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	-	16,091	16,091
当期末残高	100	25	25	81,431	81,556

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	0	86	85	65,379
当期変動額				
当期純利益				16,091
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	1	-	1	1
当期変動額合計	1	-	1	16,093
当期末残高	2	86	84	81,472

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

有価証券

子会社株式・・・移動平均法による原価法を採用しております。

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法を採用しております。

なお、評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定しております。

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法を採用しております。

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

主として、定率法を採用しております。ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（附属設備を除く）ならびに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備および構築物については、定額法を採用しております。

(2) 無形固定資産

自社利用ソフトウェアは、社内における利用可能期間（5～15年）に基づく定額法を採用しております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については債権の内容を検討し、必要額を計上しております。

なお、破綻先および実質破綻先に対する債権については、債権額から回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、当事業年度の金額は42,216百万円（前事業年度は39,285百万円）であります。

(2) 賞与引当金

従業員に対する賞与支給に充てるため、支給見込額を計上しております。

(3) ポイント引当金

ポイント制度によりお客さまに付与したポイントの使用による費用負担に備えるため、当事業年度末における将来の費用負担見込額を計上しております。

(4) 退職給付引当金および前払年金費用

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき計上しております。

数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（11年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理することとしております。

(5) 利息返還損失引当金

将来の利息返還の請求に伴う損失に備えるため、過去の返還実績等を勘案した必要額を計上しております。なお、株式会社アプラスインベストメントとの吸収分割契約に基づく補償に備えた必要額544百万円を含んでおります。

4. 収益及び費用の計上基準

収益の計上基準

営業収益の計上は、期日到来基準とし、次の方法によっております。

ショッピングクレジット事業、カード事業、ローン事業における収益は、契約方式により7・8分法、定額法、または残債方式によって収益を計上しております。なお、カード事業における収益のうち、加盟店手数料およびカード年会費収入は「顧客との契約から生じる収益の計上基準」に従って計上しております。

(注) 計上方法の内容は次のとおりであります。

1. 7・8分法とは、手数料総額を分割回数の積数で按分し、各返済期日の到来のつど積数按分額を収益計上する方法であります。
2. 残債方式とは、元本残高に対して一定率の料率で手数料を算出し、各返済期日のつど算出額を収益計上する方法であります。

顧客との契約から生じる収益の計上基準

顧客との契約から生じる収益については、以下の5ステップに基づき収益を認識しております。

- ステップ1：顧客との契約を識別する
- ステップ2：契約における履行義務を識別する
- ステップ3：取引価格を算定する
- ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する
- ステップ5：履行義務に充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する

顧客との契約から生じる収益のうち、主として、カード事業の代行手数料収入およびペイメント事業の集金代行収入については、これらの財又はサービスの提供完了時点において履行義務が充足されると判断して収益を認識しております。また、カード事業のカード年会費収入については、契約期間にわたりサービスを提供されるものであるため、時の経過に応じて履行義務が充足されると判断しており、役務を提供する期間にわたり収益を認識しております。

なお、これらの対価の額には重要な変動対価の見積りおよび金融要素は含まれておりません。

5. その他財務諸表作成のための基礎となる事項

(1) 消費税等の会計処理

固定資産に係る控除対象外消費税等は、「投資その他の資産」の「その他」に計上し、5年間で均等償却を行っております。

(2) グループ通算制度の適用

当社は、親会社である株式会社SBI新生銀行を通算親法人とするグループ通算制度を適用しておりました。2025年7月31日付で、株式会社SBI新生銀行の親会社であるSBIホールディングス株式会社による完全支配関係が生じましたが、2025年12月17日付で、当該完全支配関係は解消されております。これに伴い、2025年7月30日をもって、株式会社SBI新生銀行を通算親法人とするグループ通算制度の適用を取りやめ、以降は単体納税制度を適用しております。

(3) 関連する会計基準等の定めが明らかでない場合に採用した会計処理の原則及び手続

債務保証のうち、当社が集金を行う債務保証（提携ローン保証および回収金保証）は、信用保証割賦売掛金および信用保証買掛金として計上しております。

(重要な会計上の見積り)

会計上の見積りにより当事業年度に係る財務諸表にその額を計上した項目であって、翌事業年度に係る財務諸表に重要な影響を及ぼす可能性があるものは、次のとおりであります。

1. 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	項目	前事業年度	当事業年度
(1)	貸倒引当金	58,674	61,778
(2)	利息返還損失引当金	3,384	1,883
(3)	繰延税金資産	7,404	10,212

2. 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

(1) 貸倒引当金

当社では、すべての債権を、「自己査定実施規程」に基づき、与信戦略部が資産査定を実施し、その査定結果に基づいて、予め定めている債権・引当基準に則り、貸倒引当金を計上しております。

破綻先債権（元本または利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本または利息の取立てまたは弁済の見込がないものとして未収利息を計上しなかった債権（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上債権」という）等のうち破産債権、再生債権その他これらに準ずる債権）、および延滞債権（破綻先以外の未収利息不計上債権のほか、今後、破綻先となる可能性が大きいと認められる債権）のうち実質破綻先（破綻先と同等の状況にある債務者）に対する債権については、債権額から回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として直接減額しております。

一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については債権の内容を検討し、必要額を計上しております。

貸倒引当金は、自己査定実施規程に基づく債務者区分かつ商品区分ごとに貸倒実績率を算定した上で、それらの区分の債権残高に各々の貸倒実績率を乗じて算出しており、債権残高は、延滞月数及び債務者の個別状況に応じた区分（弁護士介入、破産など）に従って、自己査定実施規程に定められた債務者区分、商品区分毎に分類、集計を行っております。

貸倒実績率は、債権の平均残存期間などを基礎として決定した商品区分ごとの算定期間（1～12年）における当初債権発生総額と毀損累計額から算定し、3算定期間の平均値を貸倒実績率としております。

また、破綻先および実質破綻先に対する担保付債権等については、原則として債権額から担保の評価額による回収が可能と認められる額を控除した残額に対し、必要額を計上しております。

当社は、現状の貸倒引当金計上額で、当社が認識する信用リスクから発生しうる損失を十分にカバーしていると考えておりますが、将来見込み等必要な修正を加えているものの貸倒引当金の見積りは基本的に過去の貸倒実績により計算しているため、急激な経済環境の変化や担保価値の下落によって、実際の貸倒損失が予測したそれと大きく異なり、引当額を大幅に上回り、翌事業年度の財務諸表において貸倒引当金が不十分となる可能性があります。

(2) 利息返還損失引当金

利息返還損失引当金は、利息制限法の上限金利を超え、いわゆる出資法の上限金利以下の貸付利率（いわゆるグレーゾーン金利）により営業を行っていた貸金業者が、債務者から利息制限法の上限金利を超過して受け取った利息の返還請求に起因して生じる返還額（損失）に備えて設定する引当金であります。

利息の返還請求は貸付に関する契約書に債務者が超過利息を含む約定利息の支払を遅滞した時には期限の利益を喪失する旨の特約が含まれる場合、特段の事情がない限り、当該超過利息は任意に支払われたとは認められないとする2006年の最高裁判所の判断に基づくもので、一般的に、債務者からの返還請求があれば、利息制限法に定められた上限利率により計算した金額を超えるときはその超過部分（過払利息）について貸金業者は返還することとなります。

当社では、2007年度より新規顧客および既存顧客の一部について既に引き下げ後の上限金利を適用して新たな貸付を行い、2010年6月の改正貸金業法の完全施行により、新規貸付はすべて利息制限法の範囲内で実施しておりますが、過去にグレーゾーン金利で営業を行っており、債務者等から返還請求があるため利息返還損失引当金の計上が必要になります。

利息返還損失引当金の計算に当たっては、グレーゾーン金利により貸し付けられた貸付金を対象として、過去の返還請求の推移から将来の一定期間における過払利息の返還請求件数を予想し、それに1顧客当たりの返還請求見込金額および返還請求額に対する見込返還金額の比率（返還率）を乗じることにより、将来返還が見込まれる額を見積もっております。

前事業年度までの見積りにおいては、過去の返還請求件数が年々どの程度の割合で減少してきたかを分析し、その減少傾向が今後も続くことと仮定して、将来の返還請求件数を算定しております。

しかしながら、返還請求件数の予測と実績の乖離が拡大してきたことから、当事業年度より、過去の実績データに基づき、返還請求の対象となりうる契約の状態区分（取引継続、完済、脱会等）の推移と返還請求の発生状況との関係を分析し、将来の返還請求件数を算定する方法に変更しております。

これらの見積りの変更の結果、利息返還損失引当金は従来の方法による計算結果と比較して1,246百万円増加しており、経常利益および税引前当期純利益はそれぞれ1,246百万円減少しております。

近時では「グレーゾーン金利」に関する取引履歴開示請求の件数や利息返還請求額は過去のピークを大きく下回って安定的に推移しており、将来の予想を加味した見積りにより利息返還に係る追加的な損失の発生は限定的になるものと認識しております。他方、引当金額は基本的に過去の経験に基づく要素をもとに計算されており、現時点では予想できない将来の環境変化等によって、現在の引当金額が将来の利息返還請求および関連する貸倒損失への対応として不十分である場合、翌事業年度の財務諸表において追加の費用が生じる可能性があります。

(3) 繰延税金資産

当社は、親会社である株式会社SBI新生銀行を通算親会社とするグループ通算制度を適用しておりました。

2025年7月31日付で、株式会社SBI新生銀行の親会社であるSBIホールディングス株式会社による完全支配関係が生じましたが、2025年12月17日付で、当該完全支配関係は解消されております。

これに伴い、2025年7月30日をもって、株式会社SBI新生銀行を通算親会社とするグループ通算制度の適用を取りやめ、以降は単体納税制度を適用しております。

また、当社では、前事業年度まで翌1年間の課税所得に関する見直しをはじめとする様々な予測・前提に基づき、将来の税金負担額を軽減する効果を有していると判断した将来減算一時差異について、繰延税金資産を計上しておりましたが、当社の中期経営計画、過去における中期経営計画の達成状況、過去および当期の課税所得の推移等を勘案して、当事業年度より翌3年間の課税所得等に関する見直しに基づき、繰延税金資産を計上しております。

上記変更により、繰延税金資産が4,458百万円増加しております。

繰延税金資産の計上に関する判断は、毎決算期末時点において実施しておりますが、翌3年間の一時差異等加減算前課税所得の見積り変更等により、前事業年度に計上した繰延税金資産の一部、または全額の回収ができないと判断した場合には、繰延税金資産を取り崩しております。翌3年間の一時差異等加減算前課税所得は十分見込めるとしても、期末時点において、将来の一定の事実の発生が見込めないことまたは当社による将来の一定の行為の実施についての意思決定または実施計画等が存在しないことにより、将来の税金負担額の軽減の要件を充足することが見込めない場合には、同様に当社の繰延税金資産を取り崩しております。

（表示方法の変更）

当社は損益計算書における営業収益について、当事業年度より、事業活動による収益を「事業収益」と集約して表示した上で、「損益計算書関係」注記において、事業収益の内訳を当社における報告セグメントで開示する方法に変更するとともに、その他関連する注記の記載内容を変更しております。

この変更は、当社グループ内での再編の進展により、事業の重複整理や分業化・専門化が進み、報告セグメントの構成や役割が明確化されたことを契機としております。外部環境の変化も踏まえ、報告セグメントと整合した形で開示することが、財務諸表利用者にとって事業の実態をより理解しやすくなると判断したためです。

なお、集約表示とする一方で、注記において従来と同等の開示レベルを担保することで、透明性と詳細性の両立を図っております。

当該表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。この結果、前事業年度の損益計算書において、「営業収益」の「包括信用購入あっせん収益」に表示していた20,045百万円、「個別信用購入あっせん収益」に表示していた24,789百万円、「信用保証収益」に表示していた16,846百万円、「融資収益」に表示していた6,655百万円、「金融収益」に表示していた995百万円、「その他の営業収益」に表示していた23,586百万円は、「事業収益」と「その他の営業収益」として組替えており、また、「損益計算書関係」注記において、「事業収益」の内訳を「ショッピングクレジット」45,199百万円、「カード」22,980百万円、「ローン」4,464百万円、「ペイメント」19,339百万円および「その他」882百万円として表記するとともに、「その他の営業収益」は54百万円となり、その他関連する注記の前事業年度の数値についても組替えを行っております。

(貸借対照表関係)

1. 事業別営業性資産残高

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
ショッピングクレジット	1,656,040百万円	1,686,376百万円
カード	107,382	113,811
ローン	124,930	118,380
その他	20,228	21,189
計	1,908,582	1,939,757

(注) 事業別営業性資産残高は、割賦売掛金、信用保証割賦売掛金およびリース投資資産によって構成されております。

2. 割賦売掛金を流動化により譲渡した残高

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
ショッピングクレジット	- 百万円	90,482百万円
ローン	25,682	17,511
計	25,682	107,994

3. 担保資産および担保付債務

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
担保に供している資産		
割賦売掛金等	80,593百万円	156,071百万円
担保付債務		
長期債権流動化債務	80,593	156,071

4. 金銭の信託は、主として信用保証業務の一環として設定しているものであります。

5. ソフトウェアには、ソフトウェア仮勘定が含まれております。

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
ソフトウェア仮勘定	3,174百万円	3,959百万円

6. 事業別割賦利益繰延

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
ショッピングクレジット		
期首残高	39,929百万円	46,307百万円
増加額	48,014	53,425
減少額	41,636	51,593
期末残高	46,307 (6,319)	48,139 (5,946)
カード		
期首残高	484百万円	509百万円
増加額	20,070	21,357
減少額	20,045	21,247
期末残高	509	618
計		
期首残高	40,414百万円	46,817百万円
増加額	68,084	74,782
減少額	61,682	72,841
期末残高	46,817 (6,319)	48,758 (5,946)

(注) ()内の金額は、加盟店手数料であり、内数であります。

7. 関係会社に対する資産および負債

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
短期借入金	660,000百万円	380,000百万円
長期借入金	165,000	270,900

8. 偶発債務

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
保証債務残高のうち債権、債務とみな されない残高	29,464百万円	31,172百万円
従業員借入金保証残高		

(注) 保証債務残高のうち債権、債務とみなされない残高には、最大賃料保証債務(家賃の1ヶ月相当額)を算定し、前事業年度27,576百万円、当事業年度29,428百万円を含めて記載しております。

9. ローンカードおよびクレジットカードに附帯するカードキャッシングにおける貸出未実行残高

	前事業年度 (2025年3月31日)	当事業年度 (2026年3月31日)
貸出未実行残高	532,399百万円	499,632百万円

(注) 貸出未実行残高は、顧客の信用状態等により当社が任意に利用を停止できるものであり、貸出未実行残高そのものが必ずしも当社の将来のキャッシュ・フローに重要な影響を与えるものではありません。

(損益計算書関係)

1. 事業収益

	前事業年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当事業年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
ショッピングクレジット	45,199百万円	55,990百万円
カード	22,980	24,043
ローン	4,464	4,444
ペイメント	19,339	19,246
その他	882	733
計	92,865	104,457

2. 割賦売掛金を流動化したことによる損益

	前事業年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当事業年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
ショッピングクレジット	- 百万円	7,240百万円
ローン	327	459
計	327	7,699

(注) 資産効率の改善を目的として割賦売掛金を流動化した受益権のうち、一部の受益権等については当社が保有しております。また、当該流動化に伴い、割賦売掛金の時価を算定し、譲渡部分の時価に基づいて算定された譲渡原価と譲渡金額の差額を損益として計上しております。

なお、主として期限前返済による影響を反映した見積りキャッシュ・フローを、投資家が実際に投資可能な期待利回りを想定した割引率により割り引いて時価を算定しております。

3. 販売費及び一般管理費の主な内容

	前事業年度 (自 2024年4月1日 至 2025年3月31日)	当事業年度 (自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
貸倒引当金繰入額	18,551百万円	18,193百万円
ポイント引当金繰入額	3,595	2,977
賞与引当金繰入額	2,457	2,810
利息返還損失引当金繰入額	-	1,330
支払手数料	29,526	30,858
販売促進費	6,021	5,253
従業員給料手当	7,294	7,546
減価償却費	3,894	4,021

4. 抱合せ株式消滅差益

当社を吸収合併存続会社、株式会社クリアパスを消滅会社とする吸収合併に伴う抱合せ株式消滅差益を特別利益に計上しております。

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

前事業年度(2025年3月31日)

市場価格のない株式等の貸借対照表計上額

区分	当事業年度 (百万円)
子会社株式	4,963
関連会社株式	101

当事業年度(2026年3月31日)

市場価格のない株式等の貸借対照表計上額

区分	当事業年度 (百万円)
子会社株式	3,615
関連会社株式	101

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2025年 3月31日)	当事業年度 (2026年 3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金および貸倒損失	35,786百万円	37,984百万円
税務上の繰越欠損金	4,839	2,539
ポイント引当金	975	1,072
その他	3,911	4,111
繰延税金資産小計	45,512	45,708
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	1,058	-
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	36,140	34,104
評価性引当額小計	37,198	34,104
繰延税金資産合計	8,313	11,603
繰延税金負債		
前払年金費用	712百万円	1,115百万円
資産除去費用	173	251
その他	23	24
繰延税金負債合計	909	1,390
繰延税金資産の純額	7,404	10,212

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2025年 3月31日)	当事業年度 (2026年 3月31日)
法定実効税率	34.6%	34.6%
(調整)		
評価性引当額	35.4	16.6
住民税均等割	1.0	0.4
交際費	2.2	0.3
その他	1.9	7.4
税効果会計適用後の法人税等の負担率	0.4	11.3

3. 法人税および地方法人税の会計処理またはこれらに関する税効果会計の会計処理

当社は、親会社である株式会社SBI新生銀行を通算親会社とするグループ通算制度を適用しておりました。

2025年7月31日付で、株式会社SBI新生銀行の親会社であるSBIホールディングス株式会社による完全支配関係が生じましたが、2025年12月17日付で、当該完全支配関係は解消されております。

これに伴い、2025年7月30日をもって、株式会社SBI新生銀行を通算親会社とするグループ通算制度の適用を取りやめ、以降は単体納税制度を適用しております。

(企業結合等関係)
共通支配下の取引等

連結財務諸表「注記事項(企業結合等関係)」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

(重要な会計方針)「4.収益及び費用の計上基準 顧客との契約から生じる収益の計上基準」に記載のとおり
であります。

【附属明細表】

【有価証券明細表】

有価証券の金額が資産の総額の100分の1以下であるため、財務諸表等規則第124条の規定により記載を省略しております。

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価償却 累計額又は償却 累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末残 高(百万円)
有形固定資産							
建物	2,441	377	103	2,715	1,576	140	1,139
構築物	37	-	-	37	33	0	3
工具、器具及び備品	4,398	929	1,208	4,120	3,055	390	1,064
土地	161	-	-	161	-	-	161
建設仮勘定	-	841	691	150	-	-	150
有形固定資産計	7,038	2,149	2,002	7,184	4,665	531	2,519
無形固定資産							
ソフトウェア	58,091	4,536	723	61,903	42,601	3,450	19,301
その他	39	1	39	1	1	-	-
無形固定資産計	58,130	4,537	762	61,904	42,602	3,450	19,301
長期前払費用	2,931	4,441	2,422	4,950	441	40	4,509

(注) 以下のとおり当期増加額には、合併による増加額を含んでおります。

建物	3 百万円
器具備品	49
ソフトウェア	77
その他	1

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	58,674	18,618	15,514	61,778
ポイント引当金	2,754	2,977	2,704	3,027
賞与引当金	2,457	2,810	2,457	2,810
利息返還損失引当金	3,384	-	1,501	1,883

(注) 1. 貸倒引当金の当期増加額は、吸収合併による増加額21百万円を含んでおります。

2. 利息返還損失引当金には、株式会社アプラスインベストメントとの吸収分割契約に基づく補償に備えた必要額544百万円を含んでおります。

3. 利息返還損失引当金の当期減少額は、取崩額1,330百万円を含んでおります。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
株券の種類	株券不発行
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	1株
株式の名義書換え	
取扱場所	三井住友信託銀行株式会社 証券代行部 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号
株主名簿管理人	三井住友信託銀行株式会社 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号
取次所	三井住友信託銀行株式会社 全国本支店
名義書換手数料	無料
新券交付手数料	
単元未満株式の買取り・買増し	
取扱場所	
株主名簿管理人	
取次所	
買取・買増手数料	
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL https://www.aplus.co.jp
株主に対する特典	なし

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は上場企業ではありませんので、金融商品取引法第24条の7第1項の適用がありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に次の書類を提出しております。

- | | |
|--|--------------------------|
| (1) 有価証券報告書及びその添付書類
事業年度（第16期）（自 2024年4月1日 至 2025年3月31日） | 2025年6月27日
近畿財務局長に提出 |
| (2) 臨時報告書
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第12号の4の規定
（財務上の特約が付された金銭消費貸借契約の締結）に基づく臨時報告書 | 2025年11月14日
近畿財務局長に提出 |
| (3) 半期報告書
（第17期中）（自 2025年4月1日 至 2025年9月30日） | 2025年11月28日
近畿財務局長に提出 |

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書

2026年6月26日

株式会社アプラス

取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

東京事務所

指定有限責任社員 公認会計士 小野大樹
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 野根俊和
業務執行社員

< 連結財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社アプラスの2025年4月1日から2026年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益及び包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社アプラス及び連結子会社の2026年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

利息返還損失引当金の算定	
(【注記事項】連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項4. 会計方針に関する事項 (3) 重要な引当金の計上基準 利息返還損失引当金、重要な会計上の見積り(2) 利息返還損失引当金)	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社は当連結会計年度末の連結貸借対照表において、3,592百万円の利息返還損失引当金を計上している。また、連結損益計算書において1,940百万円の利息返還損失引当金戻入額を計上している。経営者は、将来の利息返還に伴う損失に備えるため、過去の利息返還損失の実績等を勘案し、将来の必要な引当額を見積っている。</p> <p>会社の利息返還損失の見積額は、将来の一定期間に見込まれる過払利息の返還請求件数、1顧客当たり返還請求見込金額及び返還請求額に対する見込返還金額の比率(返還率)等の計算要素から構成される。</p> <p>これらの計算要素の決定にあたり、経営者は過去の見積と実績の乖離要因を分析した上で、過去の返還請求件数及び請求金額並びに実績返還率をベースとして見込請求件数、見込返還請求金額、見込返還率の将来予測を行っているが、特に利息返還請求の将来見積件数については、弁護士事務所・司法書士事務所等の動向、具体的にはどの程度活発に利息返還請求を行うかという外部環境の影響を受けやすいため不確実性が高く、また外部環境に対する経営者の主観的な判断にも依存する。</p> <p>また、「注記事項(会計上の見積りに関する注記)」に記載されているとおり、会社は前連結会計年度までの見積りにおいては、過去の返還請求件数が年々どの程度の割合で減少してきたかを分析し、その減少傾向が今後も続くことと仮定して、将来の返還請求件数を算定していたが、返還請求件数の予測と実績の乖離が拡大してきたことから、当連結会計年度より、過去の実績データに基づき、返還請求の対象となりうる契約の状態区分(取引継続、完済、脱会等)の推移と返還請求の発生状況との関係を分析し、将来の返還請求件数を算定する方法に変更している。また、本件見積りの変更を決定することの適時性及び適切性に関して、会社における会議体にて規程に定める決裁権限者により承認している。当該見積りの変更に関して会社が選択した見積り手法については、その適時性も含め会社の判断に依拠する程度が高い。</p> <p>したがって、当監査法人は利息返還損失引当金の不確実性及び主観性に対する経営者の判断、及び見積りの変更の適時性及び適切性を、監査上の主要な検討事項に該当するものと判断した。</p>	<p>当監査法人は、当該監査上の主要な検討事項に関して主として以下の対応を行った</p> <p>(1) 内部統制の評価 経営者が引当額の見積りに用いる利息返還の実績データ(契約の状態区分、過払利息の返還請求件数及び金額、実際に返還した件数及び金額)の正確性、将来予測に係る経営者の判断の妥当性、当期末に見積りの変更を決定することの適時性及び適切性について、関連する業務プロセスの内部統制の整備及び運用状況の評価を実施することにより検証した。</p> <p>(2) 実証手続 関係部署への質問や経営環境の変化、過年度に計上した利息返還損失引当金残高と当連結会計年度の返還実績の比較検討を踏まえ、利息返還損失引当金に関連するデータの推移を分析し、過払返還に関する経営者の仮定の合理性を検証した。また、見積りの変更に関する会社の判断の合理性及び適時性、並びに見積り手法変更後の将来の返還請求件数の予測が過去の実績を反映した合理的な方法であるかについて検討した。</p> <p>将来の一定期間に見込まれる過払利息の返還請求件数、1顧客当たりの返還請求見込金額及び見込返還率等の経営者が引当額の見積りに使用する将来予測の数値については会社の見積数値を再計算し正確性を検討した。</p> <p>過払利息の返還請求件数については、弁護士事務所・司法書士事務所等の動向等を勘案して現実的に想定しうる見積り件数の推移に関する複数の将来予測を当監査法人独自で作成し、会社が算定した利息返還損失引当金額と比較することによって、会社の見積りの合理性を検討した。</p> <p>見積り方法の変更内容及び当該変更が連結財務諸表に与えている影響額が適切に開示されているかについて検討した。</p>

貸倒引当金の算定 （【注記事項】連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項4. 会計方針に関する事項 （3）重要な引当金の計上基準 貸倒引当金、重要な会計上の見積り（1）貸倒引当金）	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社は当連結会計年度末の連結貸借対照表において、割賦売掛金1,167,212百万円及び信用保証割賦売掛金682,016百万円を含む債権残高に対して62,037百万円の貸倒引当金を計上している。また、連結損益計算書において17,729百万円の貸倒引当金繰入額を計上している。</p> <p>会社の貸倒引当金は自己査定規程に基づく債務者区分かつ商品区分ごとに貸倒実績率を算定した上で、それらの区分の債権残高に各々の貸倒実績率を乗じて貸倒引当金を算定している。債権残高は、延滞月数及び債務者の個別状況（弁護士介入、破産など）に従って、自己査定規程で定められた債務者区分、商品区分毎に分類、集計を行っている。</p> <p>貸倒実績率は、債権の平均残存期間などを基礎として決定した商品区分毎の算定期間（1年から12年）における当初発生総額と毀損累計額から算定した値の3算定期間の平均値を採用している。債務者区分・商品区分別の債権残高及び同区分別の貸倒実績率は、基幹システム及び周辺システムにより自動集計・計算され、複雑な集計過程を経て算定されている。</p> <p>また、貸倒実績率の算定期間は、債権の平均残存期間などを基礎とし将来の回収や毀損状況を加味した上で見積っていることから、当期の回収や毀損状況の実績をもとに経営者の判断を伴うものである。</p> <p>以上より、当監査法人は当該貸倒引当金を監査上の主要な検討事項に該当するものと判断した。</p>	<p>当監査法人は、当該監査上の主要な検討事項に関して主として以下の対応を行った。</p> <p>（1）内部統制の評価 債務者区分・商品区分別の債権残高の集計及び同区分別の貸倒実績率の算定について関連する業務プロセスの内部統制の整備及び運用状況の評価を実施することにより検証した。</p> <p>（2）実証手続 債務者区分・商品区分別の債権残高の集計及び同区分別の貸倒実績率の算定に関して、ITに係る内部専門家を利用して基幹システム及び周辺システムによる集計及び計算の正確性並びに網羅性を検証した。</p> <p>過年度に計上した貸倒引当金残高と当連結会計年度の貸倒実績を比較検討し、貸倒引当金の十分性を確かめることによって、債務者区分・商品区分及び各々の貸倒実績率の算定期間の適切性を評価した。</p> <p>貸倒実績率の算定期間について、算定期間における債権の回収及び毀損の見積累計額が当初債権発生額の一定割合をカバーしているか比較した会社の検討結果の確認及び見積額の検討を実施し、当該算定期間の妥当性を検証した。</p>

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役の実務責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者及び監査役の実務責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役の実務責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見表明の基礎となる、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手するために、連結財務諸表の監査を計画し実施する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指揮、監督及び査閲に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている

場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 報酬関連情報 >

報酬関連情報は、株式会社SBI新生銀行の有価証券報告書に添付されている金融商品取引法に基づく連結財務諸表の監査報告書に記載されている。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- 1 . 上記は、当社（有価証券報告書提出会社）が、独立監査人の監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
 - 2 . X B R L データは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2026年6月26日

株式会社アプラス

取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 小野 大 樹

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 野 根 俊 和

< 財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社アプラスの2025年4月1日から2026年3月31日までの第17期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社アプラスの2026年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

<p>利息返還損失引当金の算定 (【注記事項】重要な会計方針 3.引当金の計上基準(5)利息返還損失引当金、重要な会計上の見積り(2)利息返還損失引当金)</p>
<p>連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項(利息返還損失引当金の算定)と同一内容であるため、記載を省略している。</p>
<p>貸倒引当金の算定 (【注記事項】重要な会計方針 3.引当金の計上基準(1)貸倒引当金、重要な会計上の見積り(1)貸倒引当金)</p>
<p>連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項(貸倒引当金の算定)と同一内容であるため、記載を省略している。</p>

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役の実務責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者及び監査役の実務責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役の実務責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。

- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 報酬関連情報 >

報酬関連情報は、連結財務諸表の監査報告書に記載されている。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
1. 上記は、当社（有価証券報告書提出会社）が、独立監査人の監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
 2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。